
Gravelーグラヴェルー

りき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Grave1―グラヴェル―

【Nコード】

N5908C

【作者名】

りき

【あらすじ】

主人公ケンが、突然の事故で両親を亡くしたことから始まる、謎の組織との逃亡劇。知らされていなかった自分の持つ運命によって、世の中の裏と対峙すること。仲間と名乗る少年少女との出会い、政府にかくまわれた少年の存在。ケンの見る本当の世界とは？ケンはどう立ち向かっていくのか？近未来SFファンタジーです。

序章（前書き）

男女どちらにもお読みいただける作品です。
気軽にどなたでも覗いてみてください。

序章

プロローグ

「嘘……だろ？」

ケンは口を歪ませて少し笑うように一人呟いた。

周りは爆発の音を聞きつけた野次馬と、渋滞になり始めた車の運転手達の罵声でだんだん騒がしくなってきた。でもケンはまだ、今の今まで両親が乗っていた車の残骸が広がる車道脇で、呆然とする以外のことが出なかった。

大破した車は既にその原型は残っておらず、そこで小さな炎が上がっていた。その中にいたはずの男女二人の姿は、見る限りそれらしき形のものを見つけることは出来なかった。

一人の警察官らしい制服を着た男がケンの横に歩いてきた。

「その君、今の事故の目撃者？　ちよつと話聞きたいんだけどいいかな？」

警察官は車のものであろう破片が、広い道路のそこかしこに吹き飛んでいる様子を横目で見る。普通の事故でここまで木っ端微塵になるものかなと思いつながら、反応のない少年に目を戻しもう一度話しかける。

「おい、君？　大丈夫？　ケガでもしたのかい？」

少年は小刻みに震えていた。肩を揺さぶられて、今初めてこの男の存在に気づいた様子でゆっくりと顔を向ける。そして接触の悪いスピーカーのように、途切れ途切れに声を出した。

「お……俺の……。俺の父さ……んと母さん……が……」
「えっ？」

言葉にしようとした瞬間、先ほど目で見た映像が、やっと情報と

して脳に伝達されたような感覚にケンは陥る。

本当なら今頃三人で夕飯に何を注文しようか、とレストランの席に座って話しているはずなのに……。

理解しよう、と思うと同時に、体中の力が抜けその場に座り込んでしまう。

受け入れてしまった。

事実を。

「やだよ！」

ケンは涙でむせる胸を掴みながら叫んだ。

俺、一人ぼっちじゃないか！

第一章

—
「うわあ。今日もギリギリだ。母さんなんで起こしてくれないんだよ」

ケンは頭をポリポリと掻きながら、不貞腐れた顔を見せる。

「さあさあ、文句言う暇があるなら急いで用意しちやいなさい。そんな寝癖じゃモニター越しでも笑われるわよ」

母は呆れ顔で朝食の用意をしながら、テーブルに座ってニュースを見ている父親をちらりと見る。

「ケン、今日の約束忘れてないだろうな？　ちゃんと予定空けておいてくれよ？」

ニュースを見ていた父が、首を伸ばして聞こえるように声を届ける
「うん、大丈夫。お、やばい！　朝食、今日はいらない！　授業始まっちゃう」

パンをひと欠片だけ銜えて軽く手を振る。

「さぼらないでちゃんと勉強するのよ」

父と母は、いつもと変わらぬ朝を迎えている息子の姿を見送る。

「いつまでも、こんな毎日が続けたいだけなのにねえ」

母は力なく笑う。

「きつと、大丈夫さ、あの子なら」

そうであって欲しい、と願いを込めて父呟いた。

ケンは自分の部屋にバタバタと戻り、急いで机の上のインターネツト・スクールに繋ぐ。ハードディスクの電源を入れ、座り慣れた椅子に腰掛ける。

プシュ、という小さな音と共に目の前にスクリーンが広がり、一瞬にして風景が三六〇度教室に変わる。実際は自分の部屋にいるのだが、画像・音声全てが「学校」というヴァーチャルな空間に転

送されたのだ。

電源を入れた時点で、自分は教室に居るのと同様の情報を受け取り、また自分の発する言葉や姿も、同様に教室に居る人たちにも供給されるようになっていく。

通学制の学校もあるにはあるが、数年前からこのインターネット・スクールが実装され、徐々に入学者が増え始めている。最近では子供が行方不明になるような事件が多発している事もあり、ケンの親も高校進学時に、この学校への入学を勧めた。

「よっ、ケン。今日もギリギリか？」

振り向くと後ろの席のラウ・ジンが笑っていた。ラウ・ジンとはこの学校に入ってから、なぜかいつも席が近かったのが理由で仲良くなった。とにかくいつもニコニコしてる奴で、気のいい奴。今ではいい友達だ。

呆れ顔でラウ・ジンは言う。

「寝癖、今日もついてるな。少しは身だしなみにも気をつけろって普通さ、そろそろ色気づく年頃だぞ？」

赤い瞳でニヤッと笑いながらケンの寝癖を指で触る振りをした。

ケンはそれを軽くあしらうように片手で払う。

フン、と鼻で笑いながらラウ・ジンは続けた。

「僕はね、ケン。ケンの容姿がもったいない、って言ってるんだよ？ その黒い髪。それ、染めてないんでしょ？ それにそのこげ茶の瞳だつてそうさ。まるでPUREの人間みたいじゃないか」

ケンはどきつとした。が、それにラウ・ジンは気づいてはいないようだ。ラウ・ジンは目を閉じてウツトリと想像を膨らませながら、自分のありきたりな赤い瞳やグレーの髪がケンのそれだったらどんなに、と力説している。ケンはこっそりと胸を撫で下ろした。

ピピ。ピピ。ピピ。

目覚まし時計のような予鈴が鳴った。

「あーあ、授業か。またな、ケン」

まだ話し足りなそうなラウ・ジンに手を振って前に向き直るケン。ふう、ドキッとするようなことを言うなよ、ラウ・ジン！

ケンはまだ心臓が大きく鳴っていた。

ビンッ、と画面の変わる音がして、一時間目の授業、歴史の先生が目の前に現れた。

「よし、今日は前回の続き、銀河系一美しいといわれた地球から、なーんで人間がマナに移り住んでくるようになったのか。理由を勉強していく。手元のモニター開け」

どこか知らない星の昔話でもしているみたいな授業。特にいま授業を受けているこの年代には、余計、リアリティは皆無だろう。彼らにとって人間は、歴史上の存在なのかもしれない。

そう、ラウ・ジンも周りのみんなも先生も人間じゃない。LUVと呼ばれるこの星の先住民。そして広いこの教室の中で人間なのは俺だけだ。

誰も俺が人間だって事は、知らないけれど。

第二章

二

遙か昔。地球の汚染は深刻な状況になっていた。マスクやフィルター無くしては呼吸の出来ない空気と、直接当たることの出来ない強力な日光。年々上がり続ける気温。水位の上昇で大陸が縮小し、国土が減り、人口も低下。

それでもなお、環境破壊を止める事の出来ない人類は、地球保護と自らの生存の為に最後の手段を取らざるを得なくなった。それは全ての生産と廃棄を止め、地球の自然治癒に任せるというもの。すなわち地球での生活を止め、新天地へ移住するという計画だった。

あまりにもリスクの大きすぎる道のりであることが分かっていながらも、その決意しなければならぬほど、地球は人類の生活には不適合になっていたのだ。

移住先として選ばれたのは、この星、マナだった。当時の天文学者達が、この星の環境が地球に似ていることを発見、人類の生存と繁栄の望みを掛け、やってきたのだ。何十年、何百年か後にまた地球に戻る事を願いながら。

しかし、希望と不安を抱えた人類の大移動は、様々な障害に阻まれた。未知の空間であった大気圏外への逃避行は、長期に及んだ。各国の最新技術を駆使した飛空艇でさえ、その長旅に耐えることのできなくなるものが続出していく。命取りになる計器の故障を抱え、結果行く先を見失い、道しるべもない真っ暗な闇に飲み込まれる艇もあり、その旅路は困難を期した。

その中で、数隻の日本の飛空艇のみが、無事マナにつくことが出来た。それがケン達の祖先にあたる。

この星にはLUV^{ラヴ}と呼ばれる種族が住んでいた。外見は人間と酷似しているが、人間にはない色素の髪の毛や瞳を持っているのが特

徴だ。ラウ・ジンの赤い瞳やグレーの髪の毛はその中でもかなりポピュラーなものになる。当初より、LUVと人間との婚姻を禁じる法が作られたので、その混血が生まれることは無かったが、LUVの中にも人間に近い色をしている人もいる。それに、人間のそれを真似て染髪をするファッションも好まれていたので見た目のみでは人間であるか否かを断定することは出来なかったが、ケンのように全くLUVの血の入っていない、「PURE」と呼ばれる純粋な人間が、そのことを隠していけるのも、そういう環境だからだ。

しかし、問題は他にあった。

この星への移住は成功したように見えた。が、惑星が変わり、地球には存在しなかった耐性のない外線や、慣れない物質を取り込んでいった事で、遺伝子異変が起き、この星に來た人間の人口は徐々に、でも確実に減っていた。

更にケンが生まれた頃からPUREの人口減少は著しく加速し、ケンの中学入学時にはその数は激減、とうとう今年に入って生存の確認できるPUREは自分達三人のみになったと父から聞かされた。この広い世界にたった三人。ケンはその時「絶滅寸前」と言う言葉が浮かんた。

今でこそ隠してはいるが、小さい頃はPUREであることを誇りに思え、とずっと父に言われてきた。

だが今、自分達が数少ないPUREだと周りにバレたら好奇の目で見られるからだろう。父も、そんな状況を受け、

「PUREだと言うことは、心にしっかり留めて置いてくれればそれでいい。父さんと母さんがちゃんとわかっているから。だから、周りにはあえて言うことはない」

そう言うようになった。

ケンはそう言われて、少し寂しい気持ちと、以前までの父の態度との違和感を持ったのを覚えている。しかし、それもこの境遇の変化の中では、当然のようにも感じた。

第三章

三

インターネット・スクールの良いところ（悪いところかも）は、手抜きできないところ。必ず授業ごとに小テストが出題されて、その結果に応じて宿題や補修が一人ずつ課せられる。ちゃんと勉強すれば、宿題も補修もナシとなるし、サボっていればもれなくその分のつけが回ってくる。一人一人の進捗の管理が完璧にされているという事だ。

ケンは、やっと一日の授業が終わったところでばやいていた。

「ああー、補修が多すぎるー！ こんな日に限って！」

周りでは、授業が終わった生徒達が、口々に挨拶をし、接続解除して画面から消えていく。

ラウ・ジンが後ろから嬉しそうに突っ込んでくる。

「なんだ、またサボってたんだろ？ すぐばけーつとするからな、ケンは。しっかりしごかれてなさい」

ムスっとしながら後ろを向くケン。

「なんだよ、冷たいな、おまえ。俺、今日は家族で夕飯、外食するんだよ。こんな補修やってたら間に合わないよ。なあ、ラウ・ジン。ちよつとだけでいいから、たのむっ！ 手伝ってくれ！」

情けない顔をして懇願しているケンを横目に、ラウ・ジンは澄まして答えた。

「悪いねえ、ケン君。僕、今日これからデートなんだ」

「うわ、やな感じ！」

「へへへ。外食って、いつもどこ？」

「まあね」

「そうか、まあ、自業自得だ、がんばれよ。僕は彼女待たせちゃ悪いから、そろそろ行くわ、じゃあな」

「お、おい！」

プシュン。

ケンの画面からラウ・ジンの姿が消えて、その代わりにその後ろの席で話していた女子三人がクスクスこっちを見ているのが見えた。本当に行っちゃいやがった！

自分の顔が赤くなるのを感じながら、今日は自力で適当に終わらせるしかなさそうだと感じていた。

今のうちに、母親に遅くなりそうだから先に行ってくれ、と言っておこう。

「待たせてる、と思うと益々捗らなくなるタイプなんだ、俺は」
と一人零した。

さすがに母は勘が良かった。

「さては、補修でもさせられるのね？」

出来れば理由は言いたくなかったが、ここはさつさと説明して部屋に戻ったほうが良さそうだ。

「いや、あの、まあね。授業中ちよつと考え事しちゃって。終わったらすぐ追いかけるから！」

顔の前で手を合わせ、許しを請う息子の頭をポンッと叩いてニッコリ笑う。

「あんまり遅いと、お父さんと全部食べちゃうわよ。わかった？」

「了解！いつもの店だね。俺、バイクで行くから父さんと母さんは車で先行ってて。ちゃんと俺の分も残しておいてくれよー」

言うが早いのか、転びそうな勢いで部屋に戻るケンの後姿を見つつ、まったく、と溜息を漏らす。

次の瞬間、母はふと思う。

今日の食事の席で父は、あのことについてちゃんとケンに話すつもりだと言っていた。少なからずケンには驚くべき事だろう。

面倒くさがりでだらしの無いあの子は、この事実をどう受け止めるのだろう。

言い知れぬ不安を感じながら、時計をちらつと見る。そろそろ夫

の会社まで車で向かえに行く時間だ。母は晴れない気持ちを引きずりつつも、出かける用意を始めた。

しかし、この後、夫婦の乗る車が約束のレストランに到着することはいなかった。

第四章

四

ケンはやっと泣きつかれ、今いる状況を確認し始めた。

「ここ、警察か……」

周りを見ると、急がしそうに人々が行き来しているロビーだった。ケンはその端にあるベンチに座っていた。

先ほど話しかけてきた警察官が、奥の事務室らしきところから顔を出した。ケンを確認すると、こっちこっちと手招きをする。ケンは大人しくそちらに歩き出す。

「君、どうだい、落ち着いたかい？ 君が大丈夫なら、少しさっきの事故の話を聞かせて欲しいんだけど。なに、そんなに時間はかからない……」

「父さんと母さんは……？」

警察官が話し終わらないうちに、ケンは真っ赤な目を向けて警察官に聞いた。

「……。残念だけど……」

警察官はすまなそうに答えた。

わかつてはいた。まだ目の裏に焼きつくあの惨状では、助かるはずがない。

それでも僅かながらの期待は持っていたのだ。

「そうですか……」

一体、両親に何が起こったというのだろうか？ ケンも詳細を聞きたいと思った。

「俺、いや僕は大丈夫です。お願いします」

警察官は安心した顔をして言った。

「よかった。じゃ奥の部屋で」

通された部屋は壁も床も白くて、それほど広くはない部屋だった。部屋の中央に小さめのグレーのテーブルと椅子が二脚向かい合わせに置いてあった。

手前の席に警察官が座り、どうぞ。と奥に勧められた。

「簡単に質問させてもらうけど、覚えてる事だけ話してくれればいいからね」

首だけでコクンと頷いた時、さっきからずっと肩を強張らせていた自分に気づいた。

ケンは少しずつ緊張をほぐしていった。

「どうして君はあの場に居たんだい？」

警察官の問いにそろそろとケンは話し始めた。

家族三人で夕食をする予定だったこと。約束のレストランにエアバイクで向かっている途中で、自分の両親の乗る車を見つけた。追いかけてようとしていたら、突然車が爆発して炎上したこと。そしてそれ以上の事は何もわからない、と。

「それで。それで原因は何なんですか？ 両親の車はなんであんな風に突然爆発なんか……」

ケンは自分で話しながら、また涙が溢れてくるのを感じた。

「それに関しては調べている途中なんだ。考えられるのは車の故障による引火か、あるいはあの道路に何らかの爆発物が置かれていてそれに接触してしまった、とかなんだけどね。今のところは何もはっきりとした証拠も形跡も見つかっていないんだ」

すまなそうに警察官は話すが、もうケンの意識は聞いていなかった。

故障だろうが事故だろうが、事故の原因なんてどうでもよかったのかもしれない。本当にケンが聞きたいのは、そんな事じゃない。

どうしたら両親は帰ってくるのか？

明日から俺はどうしたらいいのか？

一人ぼっちなんだ。この広い世界、一人きり。しかもPUREの最後の一人になってしまった。その事実が尚更孤独を感じさせる。

ケンは机に突っ伏して、また声を上げて泣いた。

その薄暗い部屋には、本当であればここでは傍受することのできないはずのニュース映像が、違法なデジタル回線を使ってハンディ―モニターに映され、そこから音声がかぼれていた。

少女は、画面をじっと見ていた目を、一度強く瞑ってから、おもむろに立ち上がって出かける用意をする。

「おい、リリ。どこ行くんだよ」

呼びかけられた少女は、長い髪が乱れているのも気にせずに、小さなバッグを腰に巻きながら答える。

「ちよつと……。気になるから」

「気になるって言ったって……行ってどうするつもりだよ」

「わからない……。でも、私を……私を見ているみたいで……ほつとけない！」

「おい、待て！ リリ！」

静止を聞かずに、リリと呼ばれたその少女は足早に部屋を後にしてしまった。

「……行っちゃったよ」

その少年が一人零していると、奥の部屋から、そのやりとりを聞いていたもう一人の少年が、ゆっくりと姿を現す。

「リリは、ここでじつとしてられなかったんだろ。すぐ戻ってくるさ」

その声に振り向きながら、少年はタレ目気味の瞳を更に細めながら頷く。

「きつと、リリも、あの時の俺達と同じ気持ちなんだな」

あの時。

それだけで、何を言わんとしているか、その二人には十分わかり合えた。

リリは走っていた。

どこに行くのか、何をするのか、具体的には本人にもわかっていなかった。でも、進める足を止めるとこもできない。ただ、僅かな情報を頼りにその近くまで行ってみるつもりだった。

リリは走りながら、あの時のことを、まるで昨日のことのように思い出していた。

心の準備のないままに放り投げだされる孤独。現実を受け入れる前に差し出される恐怖。すぐる誰かのいない暗闇。

でも、リリはあの二人に救ってもらえた。そのことが、どんなにその後の毎日を変えてくれたか。そうでなかったことを想像するとすら、恐ろしい。それを知っている。

「絶対一人になんてしてられない」

つい、声に出してしまう強い思い。

自分を見ているようだから、だからわかる。自分が助けてもらったから、だからわかる。

しなければならぬこと。

私にとっても。あの子にとっても。

「私が、そばにいてあげなきゃ」

第五章

五

ケンは警察を後にした。既に辺りは薄暗くなっていた。

さっきの警察官が、外にバイクを置いてある、と言っていた。あの時置き忘れて来ていたバイクをここに持って来てくれていたようだ。

助かった。

とてもあの場所にもう一度行く気にはなれない。外に出て、ぐっつと見回すと敷地の端にそれを見つけたときにそう思った。

このバイクは空気を強力に地面に吹き付ける力で浮き進む乗り物で、エアバイクと言う。サドルの下にファンがあつて、それが高速で回る。十六歳からライセンスが取れると言う事もあり、若者の間では移動の手段として最も使われている。ケンもどこに行くにもこればかりだ。

ケンがずっと欲しがっていたエア・バイク。十六歳の誕生日に家の前に置いてあつた。大喜びして両親に抱きついた。優しかった両親。

もうあの日々は戻ってこない。二度と……。

自然と流れそうになる涙をぐっつと堪えてバイクにまたがる。パワーを入れ、ブワッ、という音と共に地面から軽く浮上する。

まずは家に戻りたい。帰って心の整理をしたい。

さっきの現場を通らないように少し遠回りして、家へと向かう道を走り始める。

ブルブル。

家路について少しした時だった。

ケンの腕に付いている携帯電話が鳴る。腕時計のように手首に付けるタイプで、ケンのお気に入りだった。

でも今は誰とも話したくない。

そう思いながら着信相手を見る。電話はデールからだった。デールは今日行く予定だったレストランのオーナーだ。いつも家族で食事といえば決まって通っていたから、オーナーとも顔馴染みになっていた。

仕方ない、バイクを停めて応答ボタンを押しながら腕を顔に近づける。

「もしもし」

「あ、ケン君。どうしたの、今日はみんなで来るんじゃないのかい？」

「デールさん、すいません……」

その後が続かない。まだ自身に事実を受け入れさせることで精一杯なのに、それを客観的に人に伝えることなんてできない。

慌てたようにデールが話す。

「いや、予約をすっぽかされるくらい構わないだよ。いつも来てくれているんだから。でも、お父さんにもお母さんにも電話したけど繋がらないしね、ちよつと心配になってね」

ケンは何も返事をする事が出来なかった。

「さつき、ラウ・ジン君もお店に来て、ケン君は来てないのかって聞きにきたし。これは何かおかしいなと思ったんだよ」

ケンは、デールの言葉を上の空で聞きながら、うつすら考えていた。

なんで、ラウ・ジンまで。ああ、そういえば今日学校で外食するってラウ・ジンには言ったつけ。

構わずデールは続けた。

「だって、今日は何か大切な日だったんだらう？」

「えっ？」

ケンは急に我に戻る。

そういえば、今日はなんでわざわざ家族で外食しようなんていう話になったんだつけ。誰の誕生日でも、何か祝い事があったわけで

もない。

ケンは聞き返した。

「大切な日？」

質問したデールが答える羽目になった。

「いや、だってお父さんが予約入れてくれた時に言ってたんだよ。

この日は家族で大切な話をするから、少し静かなテーブルを頼むよ、って」

そんな話聞いてない。ケンは尚も訪ねる。

「父さん、何の話って言ってた？」

デールも困った声で答えた。

「それ以上は聞いてないんだよ。てつきりケン君の将来の事についてとか、そんな感じかと思ってたけど、ケン君も何も知らないとは思わなかったよ」

ピッ。ケンは携帯のボタンを押して一方的に電話を切った。

何？ 大切な話？ そんなの父さんも母さんも何も言ってなかったじゃないか。今までだって真面目な話をすることはあったけど、わざわざ食事をしながらすることなんてなかった。

色々考えても、やはり思い当たる事といえば一つしかない。俺達の事、そうPUREである俺たちのことだ。目立たない席を注文したのもうなずける。周りに聞かれたくはない話だ。でも、だったらなんで、わざわざ人目のある外で食事をしながら話さないといけない？ 家で話せばいいはずだ。

今となつてはもう、何の話をしようとしていたか、答えを聞く相手はいない。でもだからこそ気になる。

父は何をケンに伝えようとしていたのか？ PUREである事に関係のあることなのか？ いや、それほど大切な話なら家に何かヒントになるようなものくらいは残しているかもしれない。

家に早く帰ろう。

ケンはバイクに勢いよくまたがり、ブウウンという音と共に急いだ。

額を滴る汗が、風に混じってまた一つ飛んでいく。

第六章

六

あと五分もすれば家に着く、と言う所だった。普段から使う細い路地を進んでいた時にそれは来た。

後ろから、真っ黒い車が明らかに異常なスピードで近づいて来るのがミラーに見えた。既に周囲は真っ暗で、そのライトだけがギラギラとやけに眩しかった。

こんな細い道でなんだっていうんだ。

エアバイクは小回りこそ利くがスピードは大して出ない。あんなスピードで進んで来られたらあつという間に追いつかれる。ケンは道の端に避けてやり過ごそうと、バイクを左の壁に付けた。

その瞬間、ケンは変な印象を受けた。

既にケンの姿はあの車にも見えているはず。左に寄せたのだから、気持ち右側に車が寄るのが普通なのに、右に寄るところか左の壁に車の側面を擦るばかりに向かってくる。

「おいおい。なんだよ、危ないな……って、うおお！」

次の瞬間にアクセルを思いっきり回す。ケンの体を緊張が走る。

全く緩むことのないスピードで、その車はケンのいるほうをめがけるように進んでくる。

本能で動かす体。そして頭では、不思議と冷静に事態を飲み込む。追いかけられている？　っていうか、突っ込んでくる勢いだ。あんなのにぶつかられたら死んじゃう。

そこまで考えてケンははっとする。

まさか。こいつらのせいかな？　事故なんかじゃなかったってことか！　こいつらに父さんと母さんが殺されたんだ！　しかも今度は俺？　なぜ！

喚き声を上げながらケンはただ前に向かって逃げた。尚も黒い車は音を立てずに突進してくる。ケンを狙って来ているのは、もう明

らかだ。

このままでは追いつかれる。

焦りながらもケンはこの先に細い十字路があることを思い出した。ここからでは暗くて見えていないが、いつも使う道だ。地形は覚えている。

その十字路まで逃げ切れれば、左右どっちかに曲がって撒けるかもしれない。あの車のスピードで細い十字路まで突っ込んでくれば、曲がる時は相当減速しないと無理だろう。その隙に逃げられる。

十字路までの距離と追いつかれるまでの距離は微妙だが、ここはそれに賭けるしかない。

ケンは思いっきりアクセルを回した。バイクはガガガツと音を出しながら追いかけてくる誰かから逃げ回る。

ケンは思わず叫ぶ。

「なんなんだよ、もう！」

車が迫る、もうその距離は五メートルもないだろう。

ケンはもう後ろを振り返る余裕もなかった。自分の体ごと倒してバイクをより前へと押し出す。十字路を目指してとにかく走りまくる。

ギリギリと車との間が詰められている。十字路まではまだある。車もアクセル全開なのだろう、普通聞かないような音が車体から漏れている。

このままじゃ、追いつかれる……！

その時、黒い車が塀に車体を擦って、少し運転が乱れた。その反動で車は減速をせざるを得なくなった。

ミラーでそれに気づいたケンは、いける！ と思った。

もうちょっと、もうすぐだ、間に合え！

ハンドルを握る手に力が入る。

まさに車が再度トップスピードになるその瞬間に、ケンのバイクは十字路に差し掛かった。ケンはアクセルの手を緩めないままブレーキをかける。ハンドルを思いっきり左に切る。

急激な方向転換でバイクの車体はほぼ真横に倒れながらも、パワ
ー全開で持ちこたえた。

ガッターン！

音が響き、砂埃が立ち上がる。そのすぐ後を黒い車がものすごい
勢いで通り過ぎる。急ブレーキの音は聞こえたが、またすぐ動き出
しその音はひとまず遠のいた。

バイクは放り投げられて、横倒しになりながらプスップスツと奇
怪な音を出していた。

しかしその上にはケンの姿はなかった。ドリフトした時にバラン
スを崩し、角を曲がったところで振り落とされていたのだ。

「つつ、いってえ」

腰に手を当てて、大した怪我はない事を確認しながら呟いた。

「とりあえず行った、か？」

体中砂埃まみれになっていたケンは、両手で服を叩きながら立ち
上がる。大切なバイクはどうやら修理が必要そうだった。

散々だ。

両親が死に、自分も何者かに追われた。それなのに理由もその相
手も全く見当がつかない。先ほどの恐怖よりも、怒りがケンを満た
した。

「なんだったんだ。一体あいつら誰なんだよ」

文句を言いながらバイクを起こそうと近づいたその瞬間、聞こえ
た。先ほどまで、すぐ後ろで聞こえていたエンジン音。あの車がま
た近づく音。

十字路から顔だけ出してみる。車はもうすぐそこまで来ていた。
どこかでウターンをしてきたのだろう。

もう戻って来た！？

ケンは暫しの安堵からまた緊張に引き戻される。

バイクはもう動かない。逃げるにも黒い車は目と鼻の先まで来て
いる。

どうしたらいい!?

答えを見つける暇もなく、黒い車体は目の前に現れ、ゆっくりと停車する。

車のライトが消え、ケンはやっとその姿をはっきり見ることが出来た。もはや逃げだす隙はない。ケンはただ硬直したまま見ていることしか出来なかった。

中から降りてきたのは体の大きな男二人で、一人は銀の長い髪、もう一人は青味がかかったグレーの短髪でどちらも真っ赤な目をしていて。二人とも首の詰まった紺のスーツを着ていて、手には手錠のようなものを持っていた。しかし、警察ではない。見たことのない制服だ。

「大人しく一緒に来なさい」

銀髪の男が言う。

「手間を掛けさせないで欲しい」

感情のない声、でも威圧的な物言いだった。

ケンは二人を交互に見返しながら、後ずさりをする。

「何で俺を……? やめてくれよ……」

聞こえていないかのように、大柄の二人はズカズカとこちらに向かって来る。

あと数歩で腕を掴まれるという時だった。

「バカ! 何してるのよ!」

後ろから突然声がした。

驚いて振り返る。

背中に広がる暗闇から、物凄い勢いでこちらに突進してくる薄い影。人。

少女は、長い髪を風に乱れさせ、片手でバイクのハンドルをきつく握り、懸命にもう一方の細い腕をこちらに伸ばしながら叫ぶ。

「掴んで!」

差し出された、その決して頑丈そうではない腕に、何も考えず手を伸ばしてしがみつく。

ふわりと浮かぶ体。

バイクは重心を失いながらも、男たちの間を抜けて、その後ろに停まっている黒い車に真っ直ぐ突っ込む。

「う、うわぁ！」

ケンは引つ張られたまま思わず声が出る。

目の前のボンネットに乗り上げて、フロントガラスを割る大きな音をさせ、その勢いのまま車を飛び越した。

ケンは投げ出された足を何度もぶつけながらも、振り落とされないように必死でしがみついていた。振り向くと、男達が急いで車に乗り込んでいる。

二人が乗ったバイクは、黒い車が方向転換をしようと切り替えしを繰り返しているのを尻目に、そのまま闇に姿を同化させた。

小道で右折左折を繰り返し、簡単には追いつかれないよう十分距離を取った。

薄暗い雑木林を見つけそこで彼女はバイクを止める。幸い暗闇が味方してここならそうそう簡単に見つかることはないだろう。

ケンが口を開く。

「あ、あの……ありがとう」

この子が誰なのかはわからない。でも助けてくれたことには変わらない。ケンはまずお礼を言った。

彼女は整った眉を僅かに上げて、顔を動かさず目だけをチラッとこちらに向けて言う。

「来てよかった」

ケンは少し驚く。彼女は続ける。

「ニユースであなたのご両親が事故で亡くなったって知って、気になって。でも、思った通りだった」

何の話だ？ 彼女は俺の事を知っている？ 両親のことも？
頭がちんぷんかんぷんなまま、質問を浴びせる。

「君は俺に会いに来たって言うの？　俺は君には会ったことなんかない。俺の両親の事も知ってるのか？　君は何者なんだ？」

彼女は、はあ。と小さく溜め息を漏らした。

それをきっかけにしたように、ケンは今まで抑えていた何かの箍が外れるような気がした。後から後から言葉が口から溢れ出てくる。「なんだよ、それ。今日一日俺はわからない事だらけだ！　両親が事故で死んだ。その後は得体の知れない車に追われて連れて行かれそうになって、助けてくれた初対面の君はニュースを見て俺を助けに来たって言う。なんなんだよ。一体俺の周りで何が起きてるって言うんだ！？　俺が何したっていうんだ！　わからないよ！　何一つわからないよ！　こえーよ、あいつ等誰だよ？　家に帰りたいよ！　これからどうしたらいいんだよ！」

思いつく限りの言葉を吐き出して、その場で膝を抱えてケンは座り込んだ。もう、何がなんだかわからない。腹が立つて、また涙が溢れてきていた。

彼女はしばらくそのままずっと黙っていた。そしてゆっくり立ち上がり、ケンの肩に軽く手を置いて表情を変えないまま言った。「行きましよう。そろそろこの辺りまで探しに来るかもしれない。バイクもここにとりあえず置いておくわ。二人なら歩きのほうが目立たないし」

それに、と少女はケンに向き直って続けた。

「あなたが知りたいこと、多分教えて上げられると思うから」
ケンは、どことなく悲しげな彼女の顔を見上げた。

第七章

七

二人は、町の中心部から少し外れた、工場や大きな倉庫の並ぶ地域に来ていた。もともと工業施設を建てる為に区画された場所だけあって、住居は見当たらない。もう夜も更けていたので人気は皆無だった。

雑木林を後にしてから、彼女の後をただついて来た。さっきから大分歩いて来ているが、その間彼女は何も話さなかったし、ケンも初対面の、しかも女の子の前で泣いてしまった恥ずかしさもあり、黙っていた。

ケンは歩きながら、ぼーっと前を歩く少女の後姿を見ていた。多分年齢は自分と同じくらいだろう。先ほどエアバイクでケンを助け上げた時に見せたような覇気はなく、今見ればすらっと手足の長い、色の白い女の子、と言う感じた。印象に残る長い髪は見たことのないような漆黒で艶やかになびいている。改めて見ると、綺麗な女の子だな、とケンは思っていた。

ふと、黒いTシャツの袖から伸びる彼女の白い腕に目がいく。

先ほどケンを引き上げた方の腕を、反対の手で押さえている。押さえた手の指の隙間から、大きな青紫の痣が見えていた。まさにケンがしがみついていたあたりだった。

ケンは堪らず口を切る。

「ちよつと、その腕、大丈夫?! 痛そう……って、俺のせいだよな……ごめん。ああ……」

そういえばまだ名前も聞いてなかった。

「名前、わかんないや。えつと、俺はケン。知ってるのかもしれないけど」

彼女は答える代わりに足を止めた。どこかの建物の敷地内のように、一帯が芝生になっている。

景色に違和感を覚えてよく見てみると、地面の色が部屋一つ分程の大きさで変わっている部分がある。どうやら金属でできている開閉ドアになっているようだ。地下倉庫か何かか、と考えていると、少女がおもむろにその場にしゃがみ、それに反応するかのように地面にパネルのようなものが浮かんた。

ケンはその時はつとした。

地面に穴？　って、もしかして。

「まさか、地下へ!？」

地下の世界は治外法権だ。この世界では地上と地下は物流以外では一切関わっていない。文化もルールも、決して干渉しない、交わらない。これは互いが作ったルール。もちろんケンは地下に行った事もないし、真偽もわからない噂話程度の知識しかない。とても怖い所で、行ったらすぐに殺される、地獄のようなところだ、と子供の頃はみんな教えられてきた。この地下に広がる閉鎖空間は、凶悪犯罪者や政治犯等を労働させる為に作られたが、やがて、そこで町が生まれ今のように一つのコミュニティにまでなったと聞く。限られた場所にあるシューターでのみ地上と行き来できると聞いてはいたが、それがどこにあるのかも公表されていない。こんな近くにあったなんて……。

彼女は振りむき、腕の事には触れず素っ気無く言った。

「私は、リリ。付いてきて。離れないように」

リリが慣れた手つきでパネルを操作して、静かな摩擦音と共に地面に大きな穴が開いた。中からは黄色い光が立ち上がり、リリはその上に歩き出した。慌ててケンも光に足を乗せる。

リリが再度パネルに触れると、体が一気に黄色い光の中に落ちていった。

そこは別世界だった。

地上の世界、明るい色の建物が並び。緑の溢れるそれとは、まる

で異質。全体的に薄暗い。煙と排気で白く澱んだ空気に噎せ返りそうになる。さわやかな風の吹く地上とは違い、油っぽい熱気がべつたりとしてくる。

錆び付いた建物がひしめく様に建ち並び、通りには肉体労働者と思しき男達と、大声で叫ぶ女達がところ狭しとこった返している。

躊躇いもなく歩き出すリリを追う。初めて見る世界に、ケンは一瞬張しながら目を動かしていた。粗暴そうな輩ばかりが目につく。彼らは、襲い掛かってこそこなかったが、見慣れないケンの風貌に不信そうな表情を見せてはいた。しかし、金目のものを持っているとも思えない少年の姿に、誰もがすぐに興味をそらした。

しばらく路地を進み、一際ボロの建物の前にたどり着く。入り口でロック解除の為にリリが自分の手をリーダーに近づける。カチツと鍵の開く音がして、古びた自動ドアがケンとリリの存在に反応した。下からゆっくりと金属製のシャッターが開いていき、外見通りともいえる、散らかった部屋の中が見えてきた。

そこにはケンと同年代らしき少年がいて、こちらに顔を向けて待ち構えていた。リリは、ただいま、と先ほどまでと同じテンションで声をかける。

少年が、所々ほつれた古いソファから立ち上がってこっちに歩いてくる。

「いらっしやい。好きなとこ座つてよ。汚いとこだけだね」

と、笑って話しかけてきた。ケンはどうしていいかわからずその場で答える。

「ああ、うん。ども」

ケンより二、三歳は上だろうか。その少年は背が高く、無駄な肉のなさそうな締まった体には少し似合わない、ベビーフェイスだ。人懐っこい、目尻を下げて笑う顔が子供のよう。彼は柔らかそうな髪をくしゃつと掻きながら挨拶をした。

「俺はレンジ。今日は大変だったんだろ？　少し休んだらいい。リリ、お前も疲れているんじゃないのか？」

リリは変わらず落ち着いた声で答える。

「ちょうど彼に会った時、奴等に襲われていたわ。なんとか逃げてこれたけど……」

レンジはびっくりした様子で声を上げる。

「わお。じゃあ、ここでニュース見て飛び出して行っただのは正解だったな、リリ。すごいな。こういうのなんて言うんだっけ、デジャヴ？」

それこそ命がけで逃げてきたっていうのに、深刻さの欠片もない話し方で、ついこつちまで脱力してしまいそうな雰囲気させる。でも憎めないタイプっていうのはこういう奴を言うのだろう。

聞いているのかいないのか、リリはレンジの話には無反応でテーブルに置いてあった飲み物に手を伸ばしている。

代わりに奥の部屋からもう一つの声が聞こえた。

「デジャヴってのは、どっかで見たような風景ってやつだろ。そういうのは、虫の知らせ、とでも言うんじゃないのか？」

そっかそっか、と笑いながらソファに座りなおしたレンジを呆れ顔で見た後、溜息を吐きながらこちらに歩む。その少年は言った。「君、ケン、だったよね。僕はアッシュ。よろしく。というか、君は今聞きたい事だらけで何から聞いて良いか、っていう顔してるけど、当たり？」

ずばり、だった。どこから切り出そうかと思っていたところだ。

それを読み取ったのか、聡明そうな切れ長の目にかかる前髪を、少し疎ましそうにしながら、

「何から聞きたい？」

と言った。

まずは、落ち着きたかった。だから自分の今いる状況を把握したかった。そう思ってケンは切り出す。

「まず、君たちは何者で、なんで俺を助けてくれたんだ？　なんで俺を知っている？　俺と君たちとの繋がりが知りたい」

椅子に座り膝を抱えて、少し揺れながら、面白そうにアッシュが

答えた。

「僕達三人とケンは共通点があると思うんだけど、わからない？
よく見てみれば気づくと思うんだけど」

共通点？

ケンは質問の答えがクイズで返されたことに少し苛立ちを感じながら、まずアッシュ、レンジ、そして最後にリリの顔を順に見ていく。

なんだろう、言われてみれば彼らはケンにとって馴染みやすいように思える。何がそう思わせる？

リリが壁にもたれながら、真っ直ぐこちらを見ている。ふと蘇る、さつきリリを見たときに受けた感覚。ケンははっとする。

「髪……。髪の毛の色！ 目も！」

そうだ、ここにいる三人はみんな黒い髪に深い色の瞳。LUVにはここまで濃い色はそういない。自分で見慣れているから気づかなかった。

「って事は、まさか……？」

ケンは目を丸くして首を振りながら、答えを待った。

リリがはつきりとした口調で答えた。

「そう、ここにいる三人は皆、PUREよ」

レンジもアッシュもそれを肯定するようにケンを見つめている。

ケンは驚き、息が荒くなる。それでもなんとかボソボソと言う。

「だって、父さんはもうPUREは俺たち家族じゃないって……」

リリはレンジとアッシュに補足をするように語る。

「彼は今日、なぜ、誰に襲われたのか、見当がつかないと言っていたの」

今度はレンジとアッシュが驚いた。

「PPPについて知らない、ってことか」

アッシュが呟いた。

動揺して落ち着きのないケンに、レンジが近づき、肩を押して椅子に座らせる。

「ケン、よく聞け。なんでケンのお父さんが、お前以外にもPUREEがいることを知らなかったか。なんで今日、お前が襲われたか。これから俺たちが話すことで多分理解できると思う。それにはまず、お前が持っているかもしれない、遺伝子について話さないといけない」

ポカンと口を開けてレンジを見返すケン。

「遺伝子……？」

うん、とレンジは頷く。

「俺たちPUREEの中の誰かに、生まれたときから備わっているDNAのことだ。このことは国家機密事項だ、関係者以外が知ることはない」

アッシュが鼻をふん、と鳴らし説明し始める。

「詳しく説明するとね。そのDNAはPPPと呼ばれているものなんだ」

「PPP……」

アッシュは頷く。

「これは遠い昔、僕達の祖先がこの星に移住を始めたとき、まだUVとの友好関係に不安を抱えていた当時の人間側の研究者達が、すでに危機的状況であった僕達人間の絶滅を免れる為に防衛策として創ったものなんだ」

ケンは眉間に力が入れ、首をかしげる。

「えーっと……よくわかんないんだけど？」

まだケンには要領が掴めない。アッシュは椅子からポンと細い足を投げ出し、要するに、と続けた。

「せっかく遠い星まで子孫繁栄させる為にやってきたのに、もしもUVとうまくいなくなつて、UVが人間を目障りに感じたら？ あつという間に根絶やしされちゃうだろう？ そりゃ、今となつては馬鹿げたあり得ない話だけど、まだこの星の事が未知で手探りの外交をしていた時代の中では、一つの不安要素だったんだろうね」
確かに、人間とUVが必ず友好関係になれるかどうかなんて、

当時の人たちにわかるはずがない。それは理解できる。

「それでさっきのPPPって言うのは？」

これもアッシュが答える。

ポテンシャルティ

プログラム

フォー

ピュア

「POTENTIALITY PROGRAM FOR PURE
の略だ。ウイルスを使った計画の名前さ。当時の人たちは考えたんだ。どうしたら絶滅せずに、この星で生き残っていけるか。それには、LUVに容認してもらっただけでなく、LUVに守ってもらえるようになればいい、ってね。で、自分達がいなくなったらLUVも困るようになればいいと考えたんだ」

ケンはお手上げの様子で聞く。

「それで、それが俺にどう関係があるの？」

「まあ聞けよ、ケン。こっからが本題だ」

両膝をポンと手で叩いてから、今までとは少し違った表情でレンジはこちらを見る。ずっと黙って様子を見ていたりりでさえ、表情を強張らせる。ケンは息を飲んだ。

レンジは続ける。

「当時、そういう時代だったから人間の遺伝子研究はとても進んでいた。そして、それを利用して当時の人間達は、特別な遺伝子を持つ人間とLUVをこの世界に送り出したんだ」

「特別な？」

ケンは聞いた言葉を繰り返す。アッシュが引き継ぐ。

「そう。PPPっていうのはその遺伝子の名前なんだ。とても特殊なDNAで、そこにはある暗号が隠されている。それは、ある化学兵器の在りかと制御装置の解除コードになっている」

「ちょっと、化学兵器って？」

「うん。その兵器の在りかについては、実はまだ詳しく解明されていない部分もある。でもその威力は、この星の全ての生命体を瞬時に亡き者にできるほどの恐ろしいものだという事が、残された資料によって明らかになっている」

ケンは淡淡と話すアッシュを見つめなおす。

「当時の人はその化学兵器に名前をつけた。なんだかわかるか、ケン？」

「……さあ」

「『アース』地球と名づけたんだ。この計画への自分達の願いを込めてね」

ケンは苦々しく呟く。

「いつか地球に帰りたい、って事……？」

アッシュは頷く。

「人間側のPPPにはこうプログラムされている。『遺伝子は子供が誕生した時点で親から子に受け継がれ、親の能力はそこで消滅する。その遺伝子を有する最後の一人になったとき、暗号が現される』要は、PPPはどんな時も、この世界に一人しか持ち得ない遺ように設計されている。そして、その一人を残して血縁関係者が誰もいなくなつた時、初めて、そいつのDNAは科学兵器を発動させるパスワードになるんだ」

「でも、どうやって最後の一人になつたって事がDNAに影響するんだよ。それってすごく曖昧じゃない？」

部屋の中を小さな円を描きながら歩いていたアッシュは、足を止めて言う。

「そこで出てくるのがPPPの開発と同時に作られたウィルスの存在さ。マナに來た時点で、あるウィルスが全ての人類に故意に感染させてある」

「ウィルス……？」

「もちろん人体には有害じゃないよ。でも、そのウィルスはマナ全域を網羅する範囲で、自分達の仲間のウィルスの存在を感知しながら生きているんだ。仮に、お互いを知らない同士の親戚が、この星の裏と表で生きていたとしても、それは感知できる」

「ってことは、そのウィルスが仲間を感知できなくなつたときが…

…」

「そう。一人きりになつたという証拠。その時点でウィルスが反応

し、DNAに異常な変化をもたらすという仕組み」

ケンはあからさまに嫌な顔をする。

「それじゃあ……」

「そう。いまのケンのような状況のことだ」

「そんなこと、本当にあるの……？」

「普通、DNAは無二のものであると同時に、生まれてから死ぬまで不変のものだ。途中で変わるものじゃない。でもこのPPPは条件が揃うことで、変わるはずのないものが変わってしまうっことさ。しかも」

「しかも？」

「PPPを持っているPUREが死ねば、アースは自動的に発動する」

「！」

ケンはまさに絶句した。

あり得ない。平和に見えているこの世界にこんな影が潜んでいたなんて。

そして、自分がその影に引き擦り込まれていく予感。

リリが静かに、でも強い口調で言った。

「私も、レンジもアッシュも、皆両親を殺されたわ、政府の奴等にね」

うな垂れていたケンは驚いて顔を上げ、リリを見る。

「政府が……？ そんな、まさか」

マナは一つの国で成り立っている。地域によって管轄分けされている連邦国家ではあるが、その全てを取り仕切るのが連邦政府。その政府に自分達が狙われているというのか？

リリは部屋の隅を見つめながら話し出す。

「実際にはPPPの件を極秘に扱うIAAという特別な組織があって、彼らが動いているの。警察とは全く別管轄だけど、彼らは政府の後ろ盾がついているからどんなことも出来るわ。事故を装ったり、事件の被害者の様に仕立てられたりして、数年前から、手当たり次

第のPUREの家族に牙を向けた」

「なんでそんなことを？」

「焦ったのよ。PPPが誰なのか把握できないまま、PUREの人口が年々減り続け、いつアースが発動してもおかしくない状況になってきたから。でも、このことを公にすることも出来ない。だから、わざと潜在能力を発動させる為に、PUREの親たちを殺し、その子供たちの血を調べた。私達だけじゃない。ここ何年かで沢山の命がそのせいで亡くなったわ」

「親を殺されて、そいつらに捕まったら、それで、その後どうなるんだよ……」

ケンの質問にリリは苦しそうに答えた。

「みんな、組織に連れて行かれ、血を抜かれ体中を調べられて、PPPじゃないとわかれると証拠隠滅の為殺されてしまった。アースの存在さえ公にできないのに、こんな非人道的な行為を、政府黙認の下繰り返し返されているなんて、知られてはならないから。お陰で、ここまでPUREは減ってしまった。私たちを守る為に作られたPPPが、逆に私たちを追い詰めている……」

リリは瞼をきつく閉じ、堪えているのか手のひらをぎゅっと握って震えていた。

レンジがリリの元に歩み寄り、リリの頭をポンポンと優しく撫でた。物憂い表情を浮かべながらレンジはケンに向き直る。

「今日お前を襲ったのは、間違いなくIAAの奴らだろう。多分お前のご両親を事故に遭わせたのもな。俺たちは、最後のPUREの家族がお前たちだと知って、なんとか危険を知らせようとしていた。だけど、俺たちも逃げ隠れしてる身だから、なかなか動けなくて。でも今日ニュースで事故を知って、リリはお前のところに飛んでしまった」

そうだったのか、とケンにやっと少しずつ事の成り行きが見えてきた。きつとケンの父が今日話そうとしていたのも、このことだったに違いない。

でもそれは、ケンが今日一日感じてきた悲しみや不安よりも、もっと深く残酷な現実でもあった。

「じゃ、リリが来てくれてなかったら、俺は今頃どっかに連れて行かれて、殺されていたかも知れないって事なのか」

レンジの背中に顔を隠すようにして立っていたリリは何も言わなかった。

「ケン、聞いてくれ」

レンジが口を開く。

「俺とアッシュは一度奴等に捕まっている。施設に連れて行かれて、DNAの検査やら色々された。でもたまたま二人同じ部屋に突っ込まれたのがラッキーだった。二人で協力してセキュリティシステムをぶっ壊して命からがら逃げてきた。運も良かったんだけどね」

レンジとアッシュはお互いの顔を見合わせて、口元だけで笑う。

「俺が言いたいのは俺たちの運の良さじゃないんだ、ケン。まず俺たち二人はPPPを持っていなかった。検査済みだからな、間違いない。でも、リリは事前に俺たちがコンタクトを取ることができて、奴等に捕まる前に逃げる事が出来た。そして政府はまだPPPを見つけることが出来ずに最後のPUREであるお前を捕まえようとした。と言うことは」

レンジはわざと言葉を切り、クッションを入れて続けた。

「今日まさに襲われたケン、あるいは検査を受けてないリリ、どちらかがPPPを持つ可能性のある最後のPUREだ、と言うことになる」

「……そんな！」

レンジの話を頭で整理しながら聞いていたケンだが、最後の所でまたパニックになる。

「しかもPPPの能力はもう開放されている。どちらかのDNAがアースを発動をさせる為の暗号を示しているってことだ」

ケンは無意識にリリを振り返る。

「リリも、家族も親戚も一人もいない。お前と同様にな」

ここまで聞いて、ケンはぞっとした。今自分に流れている血が、
とんでも無い力を持っているかもしれない。あるいは、この少女が。
しかもその為に、家族を奪われ、政府に追い回された。

今日一日の、日常を逸脱するような事実の中にいながらも、それは受け入れがたいものであった。

「まだ続きはあるんだ」

アッシュの声がケンを振り向かせる。

「続き？」

「そう。PPPは人間だけではない、LUVにもいるって言ったよね？」

「うん」

「でも、LUVに全く同じ物を与えるのでは人間の優位な立場を作
ることは出来ないだろう。昔の人は当然考えた。そしてLUVのP
Pには、PUREのPPPに仕組まれた能力を完全に無効化させ
るDNAを仕組んだんだ。それぞれの能力を発動させて、人間のP
P保持者の血液に、LUVのPPPの血液を輸血すればいい」

「つまり、アースを無効化するには、両方のPPP保持者が揃って
ないといけないって事？」

「そう。有事の時には人間とLUVが仲良く解決して欲しい、って
いう事じゃない？」

馬鹿げてる。

ケンは思った。そんなことでしか、自分達の子孫を守ることとは出
来なかったのか。そんな力ずくの考えだから、祖国の星ですら捨て
ざるを得なくなったのではないか。絶望にも似た気持ちでその当時
を思う。

「あと問題は、LUV側の能力発動条件がわからないってこと。隠
された能力を封印されたままでは、なんの効力もないからね」

ケンは椅子から立ち上がる。

「でも、その条件がわかったって、そのLUVのPPP保持者も探
さないといけないって事だろう？ PUREの中から探すのなんか

より、よっぽど大変じゃないか」

解決にたどり着くには、あまりにも仮定の多すぎる話に、ケンは苛立った。

レンジがまあまあ、と言う顔をして微笑む。

「それが十五年ほど前にLUVのPPP保持者は見つかったっているんだ。今は政府に保護されている。だから政府も早いところ人間側のPPPを見つけて、このアースの恐怖の芽を摘み取りたいのだろう。最近では段々、手段が荒々しくなってきた」

ケンは不思議そうな顔をする。

「待てよ。それなら話は簡単じゃないか。俺かリリがPUREのPPPなら、素直に政府に申し出ればいい。LUVのPPPとアースを無効化できるんだろう？　それが目的なんじゃないの？　政府はなぜこんなに強引に解決しようとするんだ？」

レンジが続ける。

「政府が歓迎パーテイでもしてくれらなくても思っつか？　あいつらは俺達のことを命あるものだなんて思ってないさ」

苦い顔のケン。

「そんなの……なんでわかるんだよ」

「奴らが何が何でも急いでPPPを探し出したいのには、もう一つ理由があるんだ」

「もう一つの理由？」

「俺たちが今いる、ここ地下は地上の手が及ばないところだ。例えば政府だろ？　が自由に動き回することは出来ない。ここにはこのルールと秩序がある、それを侵さないことが鉄則だ。その代わり、ここに住む住人は決して地上に姿を現さない。地上の生活を脅かすようなことはしない、そういう決まりで今までうまくやってきた。お陰で、俺たちは政府から逃げる事が出来た訳だけだね」

確かに先ほど見た限りでは、大分怪しそうな商売をする人や、地上では見ないような物騒な武器のような物を手にしている人もいた。地上であれば許されない事だ。

「以前から、ここの住人達の中には、地下に閉じ込められている現状を打破しよう、という考えの奴等のできたレジスタンスの集団がいてね。どうやらそいつらに、アースの件が知られてしまったらしいんだ。レジスタンス達は、政府がアースを無効化してしまう前にどうにか阻止してやろうと動き出しているらしいんだ」

ケン は話を遮った。

「でも、アースが発動されて危険なのは、自分達だって同じだろ？」
それが、とレンジは続ける。

「この地下都市は、人間がこの星に来てから大分経ってから出来たものだ。アース実装時の計画では、この地下は計算に入っていない。つまり、ここは安全なんだ」

アッシュ は自嘲気味に笑う。

「わかるかい？ 地下の奴らは、アースなんて怖くない。自分達は安全な場所にしながら、地上を更地にしてしまたつていいんだ。PUREのPPPさえ手中にあれば、まさに下克上さ。そこで、政府より早くPPPを見つけようと、地下の奴らも探し始めたらしいんだ」
奪われた光と引き換えに、この住人は偉大なチャンスを手に入れたということ。なんて皮肉なのだろう。

「もうわかるだろう。取られる前に取れ、さ。どちらが早くPPPを見つけられるか、勝者がこの世界のイニシアティブを取るって事さ」

「じゃあ、俺たちは今、地上にも、地下にも狙われてるって事」

ケン は一気に不安で気持ち一杯になる。

たった一日で、こんなに世界が変わることなんてあるのだろうか。あったとして、これは本当に自分に降りかかった現実なのだろうか。泣き出したくもあり、叫びたくもあり、全てが夢だったら、と逃げ出したくもある。

落ち着きを取り戻したりりが、虚ろなげ顔をしながら口を開いた。
「LUVのPPP保持者も私たちと同じくらいの年齢の男の子だった聞いたわ。名前は、ソウ」

えっ。

思わず聞き返す。

十五年前に政府に保護されたという事は、生まれてからほぼずっと。

どんな思いで待っているのだろう。どんな思いで過ごしているのだろう。この現実を抱えて。

「ソウ」

ケン小さく呟いた。

第八章

八

カッソカッソ、という金属の当たるような音でケンが目覚めた。

ソファーに寝転がったまま、思うように開かない目を何とか凝らして周りを見回す。

ああ、そうか。ここは地下で、リリに連れてきてもらって、一通り説明をきいて……。緊張で疲れていたのだろう。色々考えているうちに、寝てしまったらしい。

昨日の事が夢だったらしいのに、と一瞬考えた。でも、間違いなく現実だ、夢じゃない。いまここにいることが何よりの証拠なのだ。昨日ここに来たときは夜だったから気づかなかったが、地下だけあって、時計のさしている時間とは思えない程薄暗い。今まで暮らしていたその地面の下に、こんな世界があったなんて、未だに信じられない。

ここは奥の部屋で、乱雑に散らかった床の上にレンジが大の字になっていびきをかいている。アッシュは壁際にある長いすで背中を向けて寝ていた。

開きっぱなしの扉の向こうに、リリが起きているのが見えた。ダイニングでハンディーモニターを手にニュースか何かを見ているようだ。

ケンは目を擦りながら起き上がる。

「おはよう」

リリは顔を上げる。

「おはよう。寝られた？ うるさかったでしょう、あの部屋」

昨日のような険しい顔ではなく、穏やかな表情のリリにケンはドキットとする。

「あ、うん、大丈夫。ぐっすり寝てた」

顔を赤くして照れているケンに気づかぬ様子で、そう、とまたモ

モニターに視線を落とした。

ははは、と一人笑いながら、ケンは傍にあつた椅子にリリとは反対を向いて腰を下ろした。何をするでもなく、手近にあるビンを取り、ジュースを一口飲み込む。小さく喉がなる。

しばらく意味も無く部屋を見回したり、自分の足を見るでもなく見たりしていたが、思い立った様子でケンは口を開いた。

「あのさ、聞いてもいいかな」

ケンは髪の毛を手でもしやもしや直しながら言った。

何？と、リリは視線をモニターに向けたまま答える。

「リリは、自分がPPPかもしれないって知ったとき、どう思った？」

んー、とその時の自分を思い返すリリ。

「両親からその話を聞いたときは、まるで人事だった。私には関係ないはず、って変に自信すらあつたくらい。聞き流していた」

ケンはリリの話を聞いて、普段の生活の中でこんな突飛な話を聞いても、すぐには飲み込めないだろうな、と想像できた。

「その一週間後よ」

ポツリと言った。

「学校からの帰り道、突然、初対面のレンジとアッシュに引き止められた。その日、家の周りにはずっと政府の人間が私の帰りを待っていたらしくて。本当かどうか確かめに、夜遅くなってからこっそり行ってみたら、家が爆発して燃えていたわ」

ケンはリリの黒い髪に隠れている横顔を見る。

「その家に飛び込むとする私を止めてくれた二人がいなかったら、私も今は施設に捕まってたかもしれない」

「ごめん、辛い事を思い出させちゃったね……無神経でごめん」

「もう……大分心の整理はついたから、気にしないで。それより、どうして？ やっぱり不安？」

「不安っていうか。昨日色々聞いて俺、大体だけど自分の置かれている状況がわかった。なんで親や俺が狙われていたのか、とか。周

りのこととか。でも、どうしてもわからないんだ」

ケンは情けないようにうな垂れた。

「どうしたらいいのか。これから、俺は何をしたらいいのか」

リリはモニターから顔をあげ、そのまま真直ぐ前を見た。そしてレンジとアッシュが寝ている奥の部屋をちらりと見やって言った。

「一緒に来て欲しいの」

ケンは意表を突かれて体ごとリリに向き直る。

「俺に？ どこへ？」

リリはまた奥の部屋を気にする。さてはあの二人には聞かれたくないようだ、とケンは察した。

「保護されているという、LUVのPPP保持者の所よ。今はコア・シティの施設にいるわ」

思わず大声が出そうになるのを、必死で押さえて聞き返す。

「コア・シティ？ どうやって入るんだよ、あんなところ」

リリは小声でケンに言い寄る。

「正面から入れるとは、さすがに思っていない。忍び込む方法はこれから考える。簡単にはいかないって事も、危険だって事も、わかってる。でも、それしかないの。自分達の力で、ソウという子に会って、何としてでもアースを永久に無効化しないと」

ケンは声を荒立てないように気をつけながら反論する。

「俺だって無効化できれば、それが一番良いと思うよ。でも、そんなの不可能だよ。そんな危険を冒すくらいなら、二人のどちらかがPPPだと、正面きつて事情を説明してみるのはどう？ 受け入れてくれるかも知れない」

リリはテーブルの上で両肘を抱えて乗り出す。

「もし私たちが名乗り出たとして、政府が必ずアースを無効化してくれる、私たちを安全に返してくれるという、保証はないでしょう？ 今の政府は信用できない。事を急ぐばかりに、沢山の命が犠牲になっていくことを黙認しているのよ。そんな政府に交渉なんて不可能よ。見つかった途端に何をされるかわからないわ」

ケンは昨日見た惨事を思い出した。リリの家族も政府に殺されたという。確かに、そんな政府を信用しろと言うのは、惨い事かも知れない。

「もうこれ以上、このDNAのことで馬鹿げた事が続いてはいけない。悲しむ人が生まれてはいけない。それには、私かあなたか、どちらが必要なの。お願い！ 危険は承知だわ。でも、私達にしか止めることは出来ないの。逃げ回っていても何も解決しないのよ！」

「ちよつと待てよ！」

ケンは椅子を蹴り飛ばして立ち上がる。

「俺にはそんな勇気ないよ！ 捕まったらどうなるかわからないんだろう？ 世界を救う為って言われても、はい、そうですかっていけるかよ！ 俺はPPPかも知れないけど、ただの高校生だ。超人でも何でもない！ 死ぬときは普通に死ぬんだ！ 俺にはそんなの無理だよ！」

言った勢いで部屋を飛び出た。

大きな音を立てて、シャッターをこじ開けるのが聞こえた。

リリは何か言おうとしたまま、ただその姿を見送るだけだった。

第九章

九

辺りは昨日来た時のような活気はなく、まだ街全体が寝ているような静けさだった。

見知らぬ街を、ケンはどこをどう歩いているのかわからなかったが、構わなかった。

ケンは興奮していた。

馬鹿なこと言うな。こんな子供だけで政府と張り合うだなんて、うまくいく訳がないじゃないか。それに、もし俺がPPPだったとしても、それは俺のせいじゃない。俺だって被害者だ、両親を殺されて、辛い思いをした。その上なんで俺が、命懸けて危険を冒さなといけないんだよ！ 大体、昨日助けてもらったのには感謝するけど、だからって、一緒に捕まってくれて言ってるようなもんじやないか。そんなにソウって奴に会いたいなら一人で行けばいい。PPPを持つてる確立はリリだって五十%だ。十分可能性はあるじやないか。でも俺はそんな危険はごめんだ。殺されるかもしれないなんて、冗談じゃない！ なんで俺がこんな目にあうんだよ、まったく！

「あああああ、もう最悪だ！」

吐き捨てるように言って、誰もいない路地に座り込む。ケンは膝の間に頭をうずめ、何も見たくない、聞きたくない、と思っていた。ケンの今までの人生は、至極平坦なものだった。暖かな両親に恵まれ、特別裕福ではないにしても不自由のない暮らし。程よくいい友達に恵まれ、学校生活も楽しくやってきた。なんの文句もない生活。

それがたった一日でこれかよ。

そう悪態をついていた時だった。

自分の足元に誰かが立っているのに気づく。その影に沿って顔を

上げると男が立っていた。

「おい、坊主。おまえ、髪の毛が真っ黒だな。ちょっとこっち来い、暗くて見えない。目も黒いんじゃないか？」

腰を屈めてケンの腕をぐいっと持ち上げる。ケンは軽がる宙に浮く勢いで、強引に立たされた。背も横幅もケンの数倍もありそうかという程の大きな男だった。顔を近づけて言う。

「やーっぱり、目も黒い。おまえ、PUREか？」

ケンは湧き上がる恐怖に襲われた。ブンブンと首を横に振って否定する。

上半身裸の男の腰には、大きな岩でも砕き割りそうな、がっしりとした斧のような得物がぶら下がっているのが見えた。ケンはぎよっとする。

「うちの親分がPUREみたいなのを見つけたら、とりあえず捕まえて来いって言ってたからな。お前見ない顔だな。ますます怪しいなあ」

アッシュが言っていた、レジスタンス。こいつがその仲間なのか、それともここまで政府の手が？

わからないが、とにかく逃げたほうが良さそうだ。といっても、大男に腕をしっかりと掴まれていてとても動けない。

「とりあえず、一度親分に見せに行こう。褒めてもらえるかもしれないぞ」

鼻歌交じりに言うと、大男はケンの腕を持ったまま引き摺って歩き出す。

「ちょ、ちょっと！ いてえっ」

逃げないと。俺がPUREだとばれたら、一体どうなるんだ。やばいって、これ！

ケンは必死に頭を巡らせるが、地面に擦れる体の痛みになかなか思考が定まらない。

誰か助けてくれ！

心の中で叫んだ。

でも、一体誰が？

ここは地上とは隔離された世界。この荒れた街で、見るからに屈強そうな男に捕まった、貧弱な少年を助けることに何のメリットがある。自分だったら助けるのか？ 答えはノーだ。自分を危険な目に遭わせてまで他人を救うなんて、酔狂な奴のすることだ。誰も他人を助けてなんてくれない。唯一の知り合いであるリリ達もこんな離れた所まで来ることはないだろう。彼らも狙われているのには変わらないのだから。

最低だ、こんな世の中。

大男は変わらず鼻歌を歌いながら、ケンを狩で仕留めた獲物のように片手にぶら下げ、のしのし歩き続けている。されるがままのケンに、抵抗する気力は失せていった。

しばらく引き摺られて、体中が傷だらけだった。どこもかしこも痛くて、その感覚すらわからなくなってきた。

死んでしまった方がいいのかもな、とふと思った。

これから生きていて、何がある。PPPであるかも知れない以上、逃げ続けるのか？ 人目から隠れ、誰と関わることもなく、ただ自分だけの為に生き続けるのか？ それに何か意味はあるのか？ 世界を平和にすることが出来るのなら、俺の人生なんてくれてやったほうがまだましじゃないか、いや、そのほうがよっぽど意味があるんじゃないのか？

ケンは歪んだ顔で笑った。

「俺の命って、一体なんなんだよ」

一体なんの為に生まれて来たんだ？ どうでもいい、もうどうにでもなれ。

ケンは考えることを、止めた。

第十章

十

全ての政府機関の中枢が集まる街、コア・シティ。街と言うものの、ここは一つの隔離された敷地の中にそれぞれの行政機関の建物や、研究施設等が集中するところで一般の市民が中に入ることはまずない。見張りなどはいないが、張り巡らされたセンサーとカメラが、どんな異物も見逃さないとばかりに全域を監視している。人気の無い警備が作る、一層人を寄せ付けない雰囲気。

街自体は白で統一され、所々に植物が植えられている。しかしその計算された配置や個性のない草花がより不自然さを際立たせて、温かみのない風景を見せていた。

そのコア・シティの最深部に、要人の住居や最高機密機関の施設が集まる、最も厳戒されたエリアがある。それまでのような大きな建物はこの辺りにはなく、それぞれ敷地もゆつたりと取られ贅沢に設計されているのがわかる。

その中でも更に奥まった場所、背の低い建物が四角く囲うように建つ施設がある。ここは、I A Aと呼ばれる組織が集まる場所だ。I A Aは、ここコア・シティにある、全ての行政機関を不定期に調査し、不正や不穏な動きなどが無いかを報告する、内部監査機関。組織の性格上、いかに政府関係者といえども、滅多にこの施設に入ることも出来なければ、ここに働く職員とも許可なく接触をすることは許されていない。いわば、コア・シティにありながらも、孤立した立場にある組織。そして、それは完璧な隠れ蓑となって、秘密を覆う。

そんな建物の中心にある、広い吹き抜けの中庭で、少年が一人ブラブラしながら立っていた。庭の角には紺のスーツを来た男が対角に佇み、表情を変えずに少年の動きに合わせて目を動かしていた。

少年は白いシャツをふわりと風に揺らしながら、つまらなそうに

地面を見ていた。透き通るような肌が強い日の光にあたる姿は、光に同化してしまいそうな儚さがあった。

少年は視線を床に向けたまま、声を出す。

「もう戻ってもいい？」

すると、その空間のどこからともなく返事をする声がする。

「あと五分、日射時間が必要です」

少年は、はあ。と溜息を付く。

最低限の健康維持。週に二度はこうやって日の光に浴びさせられる。体力低下を防止する為のトレーニングや健康診断、メンタルチェックという目では見えない精神状況を調べる検査の時間もある。どれもスケジュールの下、監視がついて行われる。

そういう時間は大嫌いだった。時間の過ぎるのがとても遅く感じるから。

でもそれ以外の時間は、もっと嫌いだった。

『好きな事をしてください』

寝ていても、遊んでいても、食べても飲んでも何をしてもいい時間。彼にとって、それほど退屈な時間はない。もう全てに飽きてしまふには十分な程、ここにいるのだから。

自分がPPP保持者だと言うことは物心付いたときには知っていた。この施設で育ち、ここ以外知らない彼にはここでの生活が全てだった。みんなから大切にされていると、幸せに思っていた時期もあった。しかし、日々を重ねるごとに、湧き上がる疑問がそんな毎日を困惑に変えていった。

なぜ自分に家族は居ないのか、自分の将来はどうなるのか、いつまでここにいればいいのか。

誰に聞いても満足の得られる答えを返してはくれなかった。皆一様に、ここにいてくれるだけでいい、とはぐらかした。

望んだわけではない、あまりに大きすぎる自分の存在理由に自己が追いつかない。平常を装った異常な生活がただ続くだけ。

「日光浴が嫌いなのですか？」

建物の方から聞きなれた声がした。男は少年に向かって歩きながら言う。

「気持ちのいい日ではありませんか、ソウ？」

「カルヴァー。何か、用？」

カルヴァーはI A Aの最高責任者であり、P P P対策に関わる全ての全ての決定権を持つ。いわば高級官僚であるが、その風貌はどこまでも温和なものだった。

オレンジの瞳が少しだけ表情を硬くして、またすぐにニコっと笑う。

「用という程の事でもないのですけどね」

カルヴァーは、まだ陰鬱そうなソウの肩に手を置きながら一緒に中庭を歩き始める。

「もうすぐ、見つけられると思いますよ」

ソウはピタッと足を止め、遙かに自分より背の高い男の顔を見上げる。

「本当、なの？」

濃いグレーのかつちりとした制服を着たカルヴァーが頷く。この制服は相応の地位の役人にのみ支給されるものだ。

「昨日、寸でのところで逃げられてしまいましたね」

ソウの金の瞳が大きく覗き込む。

「逃げる？ どうして？」

カルヴァーは目を細めて冗談っぽく答えた。

「そうですね、泥棒か何かと勘違いされてしまったのかな。お仲間が連れて逃げていってしまったそうですよ。我々の組織の人間は強面が多いですからね」

ソウも、そうだね、と笑う。

「でも、安心してください。大体の居場所は押さえてありますから、すぐまた見つけられるでしょう」

「信じていいんだよね？」

「ええ、もちろん」

ぱつとソウの顔が明るく広がる。

「その人はどんな人なんだろう？ カルヴァーは知っているの？」
答えを待つ少年は、好奇心の塊のような顔だ。久しぶりにこんなに明るい表情を見せる。

「黒い髪で、ソウと同じ歳の子、ですよ」

「うわあ。会ってみたいな」

人工に敷き詰められた芝生の上を小躍りするように喜ぶソウ。そしてそれを微笑みながら見守るカルヴァー。

カルヴァーは思い出していた。初めてこの施設にやってきた時、既にソウはここにいた。まだ五歳だというのに、ここにいる理由を理解し、どんな検査にも泣き言一つ言わずこなしていると聞いていた。

どんなませた子なのかと向かった部屋で待っていたのは、小柄な男の子だった。その子は大きな部屋の中で、一人ソファアーにちょこんと座っていた。カルヴァーの存在に気づくと、金色の大きな目でこちらをしばらくじっと見、にこっと笑った。髪は薄い蒼色、「美しい子」だと思った。その笑顔につられて、なんの事無く微笑み返したカルヴァーに、少年は破顔してこう言った。

「わあ。僕、大人が笑うところ、初めて見た」

この少年に向き合う誰もが、この少年と私的に関わることなどない。それぞれの任務を背負い、何かを期待する眼差しを向ける。笑いかける事すら、与えられていなかった日々。カルヴァーはこの子の背負う運命について十分理解していた。でも、その全てが、この子に責任はない事だと、その時に初めて気づいた。そして、この子を救ってやりたいと、思った。

肩に掛かった光るようなカルヴァーの銀髪が、風にゆらつとなびく。

「もうすぐ見つけてきますからね、どんなことをしても」

とうとう芝生に寝ころがり、眩しそうに空を見上げて夢を馳せるソウを見て、カルヴァーは聞こえない声で約束をした。

第十一章

十一

ケンは、唸っていた。

体中がズキズキと痛い。服は破れ、その隙間からは血の滲んだ皮膚が見えている。背中もヒリヒリと痛む。多分大分擦れているのだろう。時間が経てば経つほど、痛みが増していく。

大男は歩いている途中に「腹が減った」と言い出し、途中で屋台に寄った。男はケンを屋台の脚に紐で縛って、油濃そうな肉料理を先ほどからずつと食べている。見るからの大食漢。まだまだ満腹になる気配はなさそうだ。

ケンは痛み能耐えつつ、大男の顔を伺う。食べるのに夢中でこちらには意識が向いていないようだ。他に客はいない、店主がいるだけだ。その事に気づいた瞬間、緊張が一気に体に走る。

『今なら、逃げられるんじゃない？』

心臓がドキドキする。同時に思う。

『逃げたりして、失敗したらどうする？ どうせすぐ見つかる。やるだけ無駄だ』

二つの思いが交代で押し寄せる。緊張で顔が赤くなるのがわかる。大男は尚も食べ続けているが、いつ席を立つとも限らない。

やるなら、今だ！

体中の血が一気に巡る。

逃げようと思えば思うほど、体が動かない。頭で考えれば考えるほど、見つかる恐怖に揉み消される。

どうする！？

だめだ。

いや、いけるか！？

でも！

何度も何度も何度も繰り返した。

しかし、時間の経過は負の連想に味方する。共に気力は失せ、頭の火照りも冷めていく。自分に嫌気がさし、言い訳をしたくなる。逃げたって捕まってたさ。どうせ、無理に決まってた。

生きる為の苦勞より、諦めることでの責任逃れの方が魅力的に見える。

ケンハ、そう納得しようとしていた。体中の痛みが、落ち込む気持ちをも消し去っていく。

大男はしばらくして立ち上がる。

「あああ、腹いっぱいだ。待たせたな坊主。親分のところはもうすぐ先だ」

と言いながら、ケンに繋いでいた紐を解こうと巨大な体がかめた。

ケンは体を強張らせ、再開する苦痛に身構えた。

その瞬間。何かが頭上を越えていった気配。

ゴン。

音と共に、大男の顔が地面に突っ伏した。そのまま動かない。

誰か上の方から降ってきて、大男の頭をフンづけて行った……？

ケンは目を丸く開けたまま何事かと周りを見回す。すぐに屋台の店主の姿が目に入る。店主は驚いた表情でケンの後ろをただ見ている。

ケンが振り向く前に声が聞こえた。

「逃げるよ」

キン、という音と共に振り上げられた短剣が、ケンに縛っていた紐を断つ。

「こつち。走れる？」

と、その声は後ろから聞く。

「た、たぶん」

ケンはフラフラしつつも、膝に手を置き、なんとか立ち上がる。まだ大男が地面とキスしているのを背中越しに確認しながら、と

りあえず走る。

助けてもらった、のか。

ケンは笑う足をなんとか前に出しながら状況を確認する。

前に行くその後姿は、銀髪で、ケンより背の低い小柄な少年のようだった。身軽そうな体に、シャツをゆったりと纏っていて、腰には鞘に入った短剣が揺れている。

ケンは何かひっかかるような気持ちを抱えながらも、それを頭の中で紐解くような余裕もなく、置いていかれないようにがむしゃらに走った。

入り組んだ街を、暫く男について走った。大通りから一本入った路地で足を緩め、息を整える。あの大男なら走りは苦手だろう、ここまで追いかけてくるのは当分後になるはずだ。とりあえず、急場は凌いだという感じだった。

「ここでちょっと休もうか」

その言葉に、体中が悲鳴を上げていたケンは、すぐに座り込み、なんとか声を出す。

「はあ、はあ。あ、あの。ありがとうございます」

男は既に乱れのない声で答えた。

「敬語なんてやめろよ、気持ち悪いな」

この声。

「あれ？」

ケンはすぐ横に立つ、よく見知る顔を確かめようと立ち上がる。

「なかなかチャンスがなくて、助けるのが遅くなっちゃった。ごめんな、ケン」

「んああああー！」

さつきから、何か聞き覚えのあるような声に、引っ掛かりを感じていたのは、これだったのか。

「ラウ・ジン！」

すっきりしたのと、びっくりしたのとで、つい大声が出てしまう。

「おいおい、そんな大きな声だすなよ、人目につくだろ？」

いけね、という表情で、片手で口を押さえようとしますが、その動作に激痛が走った。情けない悲鳴が喉から漏れる。

「痛むだろ？ それ」

ラウ・ジンの目線の先を追うように、ケンは自分の体を改めて見る。至る所が擦り傷だらけで、血も出ている。見るも痛々しい限りだ。

「まあ、痛いけど、擦り傷ばかりだし大した事は……。っていうか！ こんなところになんでお前が？」

ラウ・ジンは事もなく笑いながら言いのけた。

「実は、ずっとケンを追って来たんだ」

ケンはぼかんとする。

「追う？ いつからだよ。ああそういえば、昨日デールさんも、お前が探しに来たって。昨日から？」

ラウ・ジンは変わらず笑顔のまま言う。

「もつとずっと前からだよ」

「……は？」

ケンはラウ・ジンとはよく話してはいたが、それは全てインターネットを介した空間であつた。実際にどこに住んでいるのか、学校以外ではどんな生活をしているのか、なんて詳しく聞いたこともなかったし、直接会うのは、今日この時が初めてであつた。思い返せば、ケンはラウ・ジンの何も知らなかった。

見慣れたはずの友人の顔が、その瞬間、鏡越しに見るときのように、どこかが歪んで見えた。

「どういう……事だよ」

ケンの顔に猜疑の表情が表れたとき、ラウ・ジンの肩越しにある顔が見えた。

「ケン！」

レンジだった。レンジはすぐに後ろに向かって叫ぶ。

「いたぞ！ こっちだ！」

額に汗をにじませ、傍に寄る。

「ケン！ 探したぞ。どこに行ってた……って、どうしたんだよ、おまえその格好！」

すぐにアッシュも追いついた。

「レンジ……、アッシュも……。なんでここに」

二人に会えてほっとするのと、反面、ばつの悪い気持ちもした。アッシュは痛々しげなケンに顔を顰めつつも、冷静に問う。

「ケン、この人は？」

二人は揃って、LUVであろうその少年を見ていた。レンジにいたっては、あからさまに怪訝な表情を見せている。

「ああ、俺の友達、ラウ・ジン……。助けてもらったんだ」

ラウ・ジンは親しげに笑顔を向け、挨拶をした。

「俺はラウ・ジン。君はレンジかな？ で、君がアッシュ。はじめまして」

三人は思わず顔を見合わせた。

「とにかく、ここにいると、あいつにまた見つかるかもしれない。どこかへ移動して、ゆっくり説明させてもらえない？」

二人はあいつ？と、いう顔だったが、ケンが頷くのを見て、仕方なく言葉に従った。

他に安全な所も見つからず、ケンの怪我の手当てを第一に、一行は隠れ家に向かうことにした。

第十二章

十二

「っただあーっつ！」

奥の部屋では、アッシュがケンの背中を消毒していた。

「痛いって、アッシュ。もういいって、沁みるってばー」

なんとか声を殺して訴えるケンだが、アッシュは手を止めようとはしなかった。

「ここは地下なんだから、どんな雑菌がいるかわからないよ。我慢しなよ、男だろ」

くつくと笑ってから、アッシュはケンに小声で聞いた。

「なあ、ラウ・ジンって一体何者なの？ 信用できるの？」

ケンは肘にできた一際大きな擦り傷に、ふうふうと息を掛けながら首をかしげた。

「それが、俺もよく考えたら、あいつのこと何にも知らなかったんだ。普段は気の合ういい奴だったけど……」

へえ、と言いながら、アッシュはラウ・ジンの待つ部屋を見やる。ニコニコと笑っているＬＵＶの少年が座っている。

根拠のない胸騒ぎを感じながら、アッシュはケンの背中を軽く叩いた。

「ぎゃあ！」

「ほら、終わりっつと」

「いたたた……」

情けない声を出しながら、ケンがヨタヨタと部屋から出てきた。

「大きな怪我が無くてよかったよ」

いつもの口ぶりで声をかけてきたラウ・ジンを、ケンはつい見いってしまう。

ケンには、ラウ・ジンがここにいる風景がとても不思議なものに見える。昨日までの平穏な日々も、両親の事故後に起きた全ても、

どちらも間違いなく現実ではあるが、ケンにとっては別世界の事にすら思える。しかし、ラウ・ジンは唯一そのどちらも知っていて、その二つを繋げる存在なのだ。

ケンが何も言わないのを見て、話を進めたのはレンジだった。

「それで、と。ケンを怪しい奴から救ってくれたのはわかった。礼を言うよ」

レンジは横に立っているケンをちらつと見た。ケンは少し決まりの悪い顔をして視線をそらした。

「ラウ・ジン、って言ったな。どうやら俺たちの事はご存知のようだから、自己紹介はしないけど、君の事を聞かせてもらえるか？」
温厚な顔のレンジが、今は隙を与えない表情を見せている。リリはその横でじつと少年の顔を見据えていた。

終始にこやかに構えているラウ・ジンは、隠すことはないとはかりにあっさりと答えた。

「僕は、ケンをずっと監視していたんだ」

「は？」

それを聞いて、ケンの目と口の全ての力が抜けて開ききった。

「監視つて、なに？ いつから？」

「ケンがPPPであるかも知れないとわかってから」

その場にいた全員が驚いた。それを承知しながらラウ・ジンは続けた。

「学校に潜り込んで友達になる事から始まって、情報収集をしながら、普段の生活も殆ど把握させてもらってた。ちなみにリリのも地下に逃げ込まれる前までは、見張りがついてたし」

リリは顎に指を当て、心当たりを思い出そうとしている。

「ちょ、ちょ、ちょっと、おまえ、PPPのこと、知っているのか？」

力が入らない様子でケンは聞いた。

「うん。PPPの事なら、ほぼ全ての情報を持っていると思うよ」
それを聞いていたアッシュが、こちらの部屋とを隔てる壁に寄り

かかりながら聞く。

「何の為にケンを監視していたの？ 目的は？」

これには少しだけ困った顔をして、うーんと言ってから答えた。

「そうだな、強いて言えば今日ここに来る為、かな」

レンジが我慢しきれず言う。

「それじゃ意味がわからない。具体的に言ってくれないか」

「具体的に、ね。ケンとリリをLUVのPPPに会わせる為、って事になるかな」

「あなた、一体何者？ 何を企んでるの？」

これには堪らず反応したリリの声も険しい。

ラウ・ジンはいささかも動揺する様子もない。椅子に座りなおして、こう言った。

「アースの無効化」

「はあ？」

レンジは顎を外す勢いで言った。アッシュもリリも解せないといった顔をしている。ケンに至ってはもう立っていられないようで、ソファアーに崩れている。

「ああ、びつくりするよね、突然こんなこと言われてもね」

ここでラウ・ジンの表情から笑顔が引いた。

「実は、LUVのPPPの潜在能力の開放条件がわかったらしいんだ」

「それって……」

強い眼差しで、ケンを見つめてラウ・ジンは言った。

「そう。あとはケンかりりにLUVのPPPを輸血すれば、全てが終わる」

四人は、凍りついたようにしばしの間動かなかった。それぞれの心の中で、それぞれの思いを巡らせていたのだ。

その静寂を壊したのは、いつもの笑顔に戻ったラウ・ジンだった。「だから、コア・シティに潜入して、ソウに会いに行こう。僕が連れて行くから」

ケンは跳ね上がる心臓と共に勢いよく立ち上がった。今朝のリリとの話を聞かれていたかのような展開に、オロオロして、言葉になつていない声をもごもご発していた。

リリは慌てる様子もなくただラウ・ジンを見つめている。ケンはレンジとアツシユの様子を伺おうとするが、二人も神妙な顔をしているだけだった。

そんなケンの様子に気が付いたレンジが落ち着いた声で言った。

「ケン。朝の事なら俺たちも聞いていた。悪い、寝てたら耳に入つてきちゃったんだ。でもな、リリにも言つたが、二人だけで何とかしようなんて、俺たちは許さないぞ」

ケンは何も言えなかった。

かつこ悪い弱音を吐いて逃げ出した始終を聞かれていた上に、ここから逃げ出し、拳句みんなに迷惑をかけた自分が、とても居た堪れなくなつた。

「なるほど。今の感じだと、話し合いが必要そうだね」

そう言いながらラウ・ジンは立ち上がる。

「明日、コア・シティに潜入できる、数少ないチャンスがあるんだ。偶然だけど、これを逃すと、また数ヶ月チャンスはないだろう。君たちが、僕を信用して一緒に来てくれるなら、明日の正午にA―三のシューター前に来て。迎えに行く」

ラウ・ジンは出口に向かいながら笑顔で言った。

「それなりの準備と情報がなきゃ、コア・シティに潜入することなんて不可能だと思う。でも、僕にはそれが、できる」

ドアの閉まる音と共に、部屋がしんとする。

レンジが相変わらずの口調で言った。

「なんなんだ、あいつ。ニコニコしてるけど、とんでも無いことあつさり言つてのけやがつて」

「しかし、興味深いね。彼の話しぶりだと、本当にPPPに関してかなりの情報を持っているようだし。でも、彼の立場が全く見えな

い」

口を曲げて考え込むアッシュ。確かに、彼が本当は何者で、彼の属するところが全くわからないままだ。

リリが重い口を開く。

「ラウ・ジンの事もそうだけど、その前に、ちゃんと話し合わないといけないよね」

リリはケンの前に歩み出る。

「ケン、今日はごめんなさい。私、あなたが全てを知ったのが、ほんの昨日だったことを考えてなかった。あなたの気持ちを全くわかってあげてなかった。自分勝手に言いたいことを。拳句に危険な目にまで遭わせてしまつて……。本当にごめんなさい」

ケンはどもりながら答える。

「そ、そんな、お、俺だつて突然飛び出したりして、大声出してごめん。それに怪我したのは、リリのせいじゃないよ。そんな謝らないで」

顔を赤くしながらお互いに気を遣いあう二人のその光景は、どこにでも居そうな、出合ったばかりの、ほんの少し意識しあう、普通の高校生といった様子だ。

ただ、いま彼らを取り巻く環境だけが普通ではないというだけ。それだけ。

レンジがまあまあ、と收拾をつける。

「それはそうと、ケンを連れ去ろうとしたのが何者かも気になるな」アッシュが答える。

「ケンの話では、PUREを探していたって話だ。間違いなく地下で活動するレジスタンスだろう。PPPの話を嗅ぎ付けて、片っ端からPUREらしい奴を捕まえる気だろうね」

先ほどのラウ・ジンといい、そのレジスタンスといい、PPPを取り巻く動きは静かに、でも着実に広がっている。もはや、知らん振りをするのは難しい。

アッシュが腕を組みながら、真剣な顔で言う。

「政府の動きが慌しくなったのを知れば、ここで先に手を打とうと、地下の奴らも必死になるだろうし。僕達もうかうかしていられなくなってきたね」

レンジは髪の毛をかき上げながら、軽く言い放つ。

「俺たちを利用しようとするばかり者共に、一花吹かせてやる」

「レンジ、それを言うなら、一泡、ね」

呆れてアツシュが答え、笑う。つられてレンジも噴出す。

ケンはその二人を見つめる。

なんで……。

こんな事を言ったら怒るだろう、でもこの二人は、今政府やレジスタンスが追いかけているPUREではない。当事者であるケンとリリに比べれば、彼ら自身の身の危険は極めて低いのに、わざわざ渦中に居続けようとする。手を貸そうとし、共に戦おうとする。その上、こんなに明るく、こんなに前向きに。

「なんで……」

ケンはふと言葉で漏らしてしまう。

ん？と、レンジが笑いながら振り向く。

でも、頭で考えたことがそのまま口から出てくるのを止められない。

「なんで、レンジもアツシュも逃げないんだよ。俺とリリだけでソウに会いに行こうとしたっていいじゃないか。だって、二人には関係ないだろう？ わざわざ危険なトコに行かなくなつてよくなるんだから。寝たふりしてたらいいじゃないか。見ない振りして、知らない振りすればいいじゃないか。それなのに……。それなのに、なんで一緒に戦おうとするんだよ！ どうしてそんなに笑ってられるんだよ！」

はっと、ケンは我に返る。

なんて事を言うんだ。力を貸してくれている仲間になんて事を……！

「ご、ごめん……。こんなこと言うつもりじゃなかった……」

「ケン」

レンジが、先ほどと何も変わらない笑顔で呼ぶ。

「俺ももし、お前の立場だったら同じ事を思つかもしれない。確かに、逃げ出すほうが得策なのかもしれないし、知らん振りして、安全なところで事が過ぎるのを待ってることだってできるしな」

レンジはケンの両肩に手を置く。

「でも、それじゃ、俺は嫌なんだ。俺の家族もみんな殺された。強引に施設に連れて行かれて、気が狂いそうな怒りに震えたよ。もう死んだっていいとも思った。でもそこで同じ状況のアッシュに会った。アッシュも俺と同じ様に落ち込んでてさ、俺、励ましたんだ。バカ言うな、諦めたら終わりだろ！　って。でもそれって、自分を励ましてたって事なんだよな。あそこから脱出できたのは、確かにアッシュと協力したからだけど、でも、もし一人だったら、生きて出てやるうって、気持ちにすらなれなかったと思うんだよ」

レンジは恥ずかしいのか、わざとアッシュから顔を背けた。

「ここにいて俺たちは、同じ痛みを持っている。でも、運よくこうやって集まることが出来た。今を悲観して慰めあうことも出来るけど、それは何も生みださない。辛いからこそ、なにくそって立ち上がる力を与え合えるんだ」

ケンは肩を持つレンジの手に力が入るのを感じた。

「だから、俺は行くよ、お前たちと一緒に。危険だろうが、なんだろうが、一緒に行く。前を見る生き方、したいんだ。それに、ケンとリリの二人じゃ、どうなるか心配で昼寝もできねーよ」

リリは顔を伏せて半べそをかいていた。レンジが何で泣いてるんだ、と慌ててタオルを渡している。

ケンも言葉を発することが出来なかった。ただ立ち尽くしてレンジの横顔を見返して佇んだ。

「レンジ、それを言うなら『夜も眠れない』だろ」

アッシュがソファーにゆっくり腰を下ろして静かに言った。

「僕も同じようなもんだ。野次馬だから、首を突っ込みたくなる。」

それに、結末を知りたいんだ、この、人類の偉大なるおバカ計画の、
ね」

リリがタオルの下から口だけだして、おバカ、とアッシュに言い、
軽く蹴った。

誰もが、この払拭したくてもできない現実を、真っ向から受け止
めている。それでも尚、笑って居られるのは仲間が居るから。一人
ではないから。

昨日初めてあった三人が、いまケンにとって一番身近に居て、一
番親身な存在になっていた。

そうか。

ケンは理解した。

昨日からずっとイライラしていた。

自分の置かれた境遇に悪態をつき、自分だけが辛いと思い過ごし
た。それは、ケンにとって心のいい逃げ場になっていた。可愛そう
な自分に気持ちよくなれば、現実はいくらか霞む。

でも、わかっていた。そんな事をしていたって、何一つ変わらない。
い。

両親の死、PPPの存在、アースの脅威、地下の世界。

もう驚くことも、悲観することも、散々し尽くしたはずだ。文句
や弱音を言うのも、そろそろ終わりにしなくてはいけない。

きつと、ここにいる仲間も、怖くないはずはない。逃げることを
全く考えないわけではないだろう。

俺と同じなんだ。でも、それ乗り越えて、前へ進もうとするか
しないか。一人ではないから、その先に行きたいと思うんだ。

かっこ悪いところを見せたくないって思える仲間がいるから。

見栄を張るんだ。怖くない、俺は怖くなんか無いって、精一杯力
ツコつけて、見栄張ればいい。

きつと、みんなそうなんだ。全部、お見通しでいいんだ。

「やってみよう」

ケンは決心したように、微笑む。

「俺も、やれるだけやってみるよ、みんなと」
三人は揃ってケンを見つめた。初めて四人が、一緒に笑った。

第十三章

十三

「では、おまえが見たのは間違いなくPUREだったと言うのだな、ガフ？」

大男は申し訳なさそうに、大きな体を曲げて答えた。

「そうなんですよ、ヴィカの姉貴。ちよっと目を離れた隙に、逃げやがりました。エヘヘ」

地下の中でも一際明かりの届かない薄暗い街のはずれ。廃材や、使い古された車などの置き場になっている、巷では『スクラップ・エリア』と呼ばれる一角に、その建物はあった。

以前は何かの工場に使われていたらしく、ポンコツで埃っぽくはあるが、広さだけは十分な廃屋である。中には流れ作業で何かを作っていたと思われるレーンが数列並んでいるが、どれも半壊しているか、ガラクタが置かれているかで、使われなくなつてからの年月を感じさせる。

その建物の奥には、昼間でも暗いこの倉庫の中を照らすために、照明を寄せ集めた一角がある。その辺りに、数十人の体格の良い男たちが思い思いに散らばつて騒いでいる。

「ガフのことだ、どうせ途中で飯でも食つて、店に置いてきちまつたんだろっ」

いかにも粗暴そうな男達が、ガフと呼ばれる大男に、口々に野次を飛ばし馬鹿にする。

そんな下品な笑いの中で、一人神妙な顔で思考を巡らせているのが、ヴィカだった。

緑色の長い髪に燃えるような赤い瞳。鍛え上げられた筋肉が、屈強そうな男達の中でも一際目立つ。体の所々に古い傷跡が見え隠れし、今までの人生が平穏でなかった事を見せつけているが、女性らしいシルエットは損なつておらず、深く入ったスリットの脇から艶

かしい脚線を見せていた。

女だてらにこんなゴロツキを集めて、まとめてくるのも楽ではなかった。燻った日々に嫌気がさすのも、我慢してきたのだ。

それもこの時の為。

ヴィカにはこの地下で、一生を終えるつもりはない、という強い意志があつた。そしてこう信じていた。

必ず好機が訪れ、それを見逃さない、と。

とうとう、今がその時だ。なんてパーフェクトなだろう、とヴィカは顔が自然にニヤける。

アースという地上を無にする化学兵器の存在。そしてその鍵を握るPPPを持つPUREが、まさにこの地下にいるという情報。

連邦政府は、血眼でそのPUREを捜しているらしいが、ここ地下では自由に動き回ることすら難しい。

なんて滑稽。全てが私に味方する。すでに軍配はこちらに上がっているようなものだ。これこそ、好機。見逃さずに掴めそうだ。

どうやって、このゲームを進めて行こうか、ヴィカは楽しくてしようがなかった。アースさえ手中になれば、それを盾に地上の奴らをどうすることもできる。

散々怖がらせ、甚振った後で、地上を更地にしてしまうのも、気持ち良いだろう。しかし、建物や植物がなくなるのも寂しいか。脅し続けて、好きなだけ要求を飲ませるのも良いかもしれない。

やり方次第では、この世界そのものを、自分で支配出来てしまうだろう。

堪らない。

今までの抑圧から開放されるだけでは、もう飽き足りないのだ。想像はとどまらない。

しかし、何においても、盾になる存在を手に入れるのが先決だ。

「お前達、よく聞きな」

ヴィカは椅子から立ち上がって声を張る。

「そろそろ、お遊びも終わりだ。私たちが地上で大手を振れるのも、そう遠くないだろう」

男達の間におお、と喚声上がり、手に武器を掲げる者もいる。「その為には、だ。まずガフが今日見つけたPUREを何としても捕まえてきな。政府の奴らも、隠密とはいえ、探しに来ているはずだ。でも、ここは地下だ。奴らの好きな様にはさせないよ」

男達の中の一人が言う。

「親方。そのPUREが何だっていうんです？ そいつを捕まえたら、いい餌になるんですかい？」

ヴィカはこの計画の全てを、自分の手下には伝えていない。それには理由がある。

まず、情報漏洩と手下の寝返り防止。この件は政府も手をだしている。一人裏切つて小僧を政府に渡されたり、取引でもされたら、目も当てられない。

それと、もう一つは簡単だ。計画なんて教えなくても、男達はヴィカの言う通りに動く。

説明する必要があるのだ。

「まあ、そんなもんだ。とにかく今回の計画には必要不可欠って事だけは覚えておきな。いいかい」

ヴィカが一段と声を上げて言う。

「必ずそのPUREを政府の奴らより早く捕まえて来な！ ただし、生け捕りだ！ 決して殺すんじゃないよ！ わかったかい！」

野太い声で、おおおお。と建物中に響かせたあと、男達はすらすらと街に向かって、歩を進めて行った。

「ガフ」

ヴィカが呼び止めると、大男は頭を掻きながら、ヴィカの元に歩み寄る。

「お前が一番PUREの小僧を良く知っている。顔を見たんだからねえ。そうだろう、ガフ？」

「あい、そうでさあ、姉貴」

ガフは褒められたかのように、照れながら首を縦に振って答える。
「なら、お前が、もう一度あの小僧を捕まえるのは簡単だよねえ？」
ガフの返事を待たずにヴィカは叫ぶ。

「だったらとつと出てつて、捕まえて来な、このボンクラが！」
わああ、と情けない声をだして、ガフは出口へと重たい体を引きずって行った。

ふう。と溜息をつき、ヴィカは一人、また椅子に座り今後の成り行きをシミュレートする。

失敗は許されない。失敗などありえない。世界をひっくり返してやる。こんなチャンスはそうそうあるもんじゃない。

しかし、PPPという摩訶不思議なものの存在を聞いた時には、ヴィカも驚いた。

情報屋が言っていた。この遺伝子は、特殊な条件下でしか効果がでない。そのせいでPURE共は、政府に片っ端から親兄弟を殺されて、逃げ回っていると。

「怖い世の中だねえ」

ヴィカは、深く考えずそんな言葉を口にして、ニヤリと笑った。

「あのお、ヴィカ様」

振り返ると一人の手下が戻ってきていた。

「なんだい、さっさと探しに行けと言ったろう、聞こえなかったかい」

険しい表情を見て、縮こまりながらも用件を伝えた。

「例のPUREの件で、情報を持ってるっていう奴が外に居まして、ヴィカ様に会わせると……」

ヴィカは眉を寄せる。

怪しい。

この件は限られた組織にしかまだ漏れてないはず。
しかも、そのいずれもが、喉から手が出るほど、PUREの居所を知りたがっている。一体何者？なぜここに来た？

様々な疑念が沸くが、話を聞いてみるのは損にはならないだろう、とヴィカは考えた。

「ここに連れてきな。一体どんな奴なんだい？」

「はあ、どんな奴って、まだ子供でさあ」

ヴィカは興味深げに、客人を迎えた。

第十四章

十四

カルヴァーは朝から行われた、この国の首席にあたる、連邦議長との報告会を終え、施設に戻ってきた。一昨日の取り逃がしの件で、回りくどい嫌味を言われて珍しく虫の居所が悪い。

荒れた気分のまま廊下を進み、その勢いで自室のドアを開けようと手を伸ばしたが、ピタッと止めた。

ドアロックを外す為の操作パネルが、緑色になっている。閉めて行ったはずのロックが解除されているという意味だ。

一瞬戸惑ったが、カルヴァーはすぐに先ほどの強張った表情を和らげた。この部屋のロックを開けられるのは、部屋の主ともう一人しかいないのを心得ているからだ。

静かに中にはいると、手前のソファーにはその影はなかった。その場から部屋の奥に目線を延ばすと、窓際のデスクの上に置いてある大きなモニターの端から、細い肩がちらつと見えていた。

「今はフィジカルトレーニングの時間ではなかったですか？」

咎める気など更更無い気安さで声をかける。

一瞬の間を置いて、ひょっこりとその侵入者は顔を出した。

「ごめん、ちょっと今日は気が乗らなくて」

言いながら立ち上がり、カルヴァーに席を譲る素振りを見せた。

「ははは。ここはいい隠れ家になるでしょうからね。しかし、ここで匿っているのがわかったら、私も共犯で叱られてしまいますから、あまりトレーナーを怒らせないでくださいよ」

「うん。カルヴァーには迷惑かけないようにするよ」

自ら言うように、どこことなく少年は元気が無いように見える。

「でも、どうしても辛いときは、いつでも来て、休んでいいですよ、ソウ」

「ありがとう、カルヴァー。今からトレーニングしてくるよ」

ドアに向かうソウの背中に、カルヴァーは問いかける。

「何か、私に用事があったのではないのですか？」

聞かれた少年は、後ろを向いたまま、うつん、と答えたが、振り向き様に見せた笑顔はいつものそれだった。

「なんにもないよ、大丈夫。安心して」

カルヴァーはソウが出て行ったドアをしばらく見つめ、デスクについた。最近カルヴァーのいない時に、よくこの部屋に逃げ込んでいることも知っていた。少し気がかりではある。

あまり過保護もよくないかも知れない。

どうしてもソウには甘くなってしまう。自省しつつ、椅子に座りなおし、モニターに向き直る。画面に、新しい報告ファイルが受信されているのに気づく。

『重要』

と、書いてある。専用パスワードを入れて開く。

メールは、先日解明された、LUVの潜在能力発動条件についてだった。念のために再調査を命じた専門チームの報告内容を一通り読む。

「やはりそうか……」

呟いて、そのファイルを閉じた。

それはカルヴァーが予想していた通りの結果だった。既に、ソウはこの条件を充たしているという事で間違いない。未だソウの血液からは暗号らしきDNA配列は見つかっていないことから再調査を命じたが、これで確定されたということだ。が、なぜソウのDNAはまだ変化を見せていないのか。また追加の検査が必要になりそう

だ。
しかし、もうあとはPUREだけ。それも、手の届くところにある。

カルヴァーは別のファイルを開く。

ケンとリリの顔が映し出され、彼らのプロフィールと、近況が添

えてあつた。どちらもまだ子供だ。しかし、必ずどちらかに、太古の愚かな人間が仕込んだ遺伝子が隠されている。そして、ソウを自由の身にする為の、鍵を持っている。

「とうとうここまで追い詰めたか……。長かったな」

カルヴァアの容赦のない術策で、PUREの子供たちは次々にこの施設につれて来られた。親をはじめとする親族を全て殺し、遺伝子を調べ、PPPを持っていないとわかると、彼らの命も無情に奪った。

カルヴァアには夢があつた。いつか全てが終わったらソウを引き取り、今まで彼が知らずに過ごした幸せを、自分が与えてやろうと。全てはその為、致し方ないことだ。自分がしていることは必要悪だと考えた。

早くソウをここから出してやりたいが。

ソウ自身が待ち焦がれているのはもちろん、カルヴァアの望みでもある。しかし、実際のところ、この二人を捕まえてからの流れを考えると、そうそうすぐには叶いそうも無い。

まずは二人のDNAを徹底的に調べ上げ、どちらがPPPであるかが判明しても、その後すぐに無効化に着手するわけではない。アースの所在の確認から始まり、このPPPプログラムの解明、実際の被爆時被害シュミレート、更にはアースを有効利用できないかどうかの模索もされる。カルヴァアは気が進まないが、これは政府の意向であるから逆らえない。少なくとも、数ヶ月は要するだろう。

ソウは、PUREに会えることも楽しみにしている。しかしそれも、ソウの楽しみにしているようなものにはならないだろう。二人のどちらがPPPでも、しばらくの間は実験材料として、死なない程度の扱いで拘留されるはずだ。そんな姿でソウに会わせる訳にはいかない。

カルヴァアはモニターの画面を閉じて、一つ溜め息を漏らした。今度はスピーカーフォンのボタンを押す。

「シュリを」

『かしこまりました』

スピーカーの向こうから秘書の声が聞こえた。すぐに部屋のベルを鳴らす音が聞こえる。

「入れ」

ドアが開き、紺のスーツの男が入ってきて敬礼する。

「お呼びでございますか、カルヴァー様」

「一昨日の少年の居所は掴めたのか」

「はい、地下に入って行ったのはどうやら間違いありません。目撃者がおりました。黒髪の少女に連れられて、同じく黒髪の少年が町の中に消えていったと」

「……やはり一緒にいたか」

シュリは何も言わないが、視線だけを下に向け肯定した。

カルヴァーは軽く溜め息をつく。

「地下では大規模な搜索はできません。衛星からの追跡もできません。人員は送つてあるのか」

「はい、目立たないよう少人数でのチームをいくつか送つてあります。地上との出入り口全てにも見張りをつけました。それから、地下の情報屋にも手を回してあります」

「うん。最近、地下の動きが活発化してきているらしい。PPPを奴らの手中に渡そうものなら、厄介極まりない。何としても、地下の連中に捕まる前にこちらで見つけ出せ」

カルヴァーは椅子から立ち上がり厳しい表情で言った。

「多少揉め事になつても構わん。必ず捕まえる」

「かしこまりました」

「邪魔をする者があれば、地下の者だろうと、構わん、殺せ」
無表情ながら、戸惑っている様子の部下に続ける。

「捕まえる、必ず。何をしても構わん」

敬礼をし、出て行こうとするシュリを、それから、とカルヴァーは引き止める。

「何か」

シュリは足を止め振り返る。

「ソウのトレーナーに、今日は緩めのメニューにと」
先ほどの鬼気とした表情を緩める上司に、シュリは再び敬礼をする。

「かしこまりました。カルヴァー様」

残された部屋で、今しがた自分が言った言葉を思い返し心の中で言う。

ソウには汚れた世界を見せたくない。その代わり、自分はどこまで汚れても構わない。そうする事でしか、彼を守ってやることが出来ない。その為には、PUREのPPPを何としても捕まえないければ。

何としても。

第十五章

十五

四人は今後の動きについて、昨晚から話し合いを続けていた。

政府に名乗り出て、穏便に事態を收拾させるという方法も選択肢にはあつたが、やはり政府への不信感は拭いきれなかった。四人の心の底辺に、政府にされた非道は、ずっしりと沈殿していた。

コア・シテイに向かうにしても、いま一つ素性の知らないラウ・ジンに着いていくのは、抵抗がある。ならば、彼に頼らないで行くことはできないか、と話し合っていたところだった。

レンジとアッシュが以前、施設にいたことがあるので、内部には多少の案内があるが、施設周辺については大分勝手が変わってしまった様だ。

両手を後頭部で合わせて、椅子の上で伸びながら、レンジは思い出していた。

「あん時はさ、施設の裏側がまだ建設中の更地だったんだよ。だから、敷地の外に出ればもう、走るだけって感じだったんだよね。な？ アッシュ」

「そう。でもネットで調べたところによると、既に裏側は施設の新しい研究所が建っている。だから同じルートで潜り込むことは不可能。どちらかと言うと、僕達のせいでおさら警備システムは強化されてしまっているようだね」

お役所相手に、してやった過去を思い出しているのか、アッシュはなんだか嬉しそうだった。

どこか緊張感のない二人とは別に、リリはいたって真面目な顔で持ちかける。

「ソウって子は街の外には出ないのかな。中に入るのが難しいというなら、外に出たときに狙って、っていうのは？」

ケンが大きく頷いて

「そつだよ、そつだ！　なんでそんな簡単なことに気付かなかったん……」

「気が付いてたよ、そんな事は」

言い終わる前にアッシュに遮られる。

「でも、残念ながらそのアイディアは没。彼は十五年前に保護されてから、ただの一度でさえも、施設の外には出ていない」

その情報はケンとリリの気持ちを曇らせた。かわいそつだ、などという陳腐な感情とは違う、なんだか釈然としない様な、チクンと胸を刺された様な気持ち。

リリは長い髪を指でとかしながら、言い出しにくそうな顔で、珍しくはつきりしない口調で言い出した。

「私……ね。こんなのおかしいのかもしれないけど、そのソウつて子、とても気になって頭を離れないの」

その発言に、なぜか全く関係のないはずのケンが動揺している。

その様子を見て笑うレンジと、リリの目を見て続きを待つアッシュ。「と、いうと？」

「うん。その子、きつと私たちなんかよりずっと、辛い思いをしてきたんじゃないのかな、つて。小さい頃から、そんな施設に入られて、色んな責任を勝手に背負わされて、何が普通で何が普通じゃないかもわからないままで。うまく言えないけど。ずっと。寂しくないかな、つて」

たしかに、とケンは思った。

ケンは今まで、選択することができる環境にいた。少しの努力があれば自分の意思で進行方向を変える事ができた。ただ、何でも面倒だ、面倒だ、と楽なほうにしか進んで来ていなかったのは、今では自分でもわかってる。でも、ソウという少年は選ぶ道はあったのだろうか。道は目の前の一本しかない、分岐がない事を不思議に思うことすらない。環境、と一言で言ってしまうえば簡単だが、それでは余りにもモヤモヤする。

ケンは思い切って相談する。

「あのさ。俺たち、ソウって奴に会いにくついでにさ、そいつを助け出してやることって出来ないのかな」

リリが真一文字に結んでいた口を、ぱっと開いて言った。

「うん！ 私と同じこと考えてた！」

二人はお互いを見合い、大きく頷く。

茶化す様に視線を送るレンジとアッシュ。ケンがそれに気が付く。
「ああ。あの。ごめん。そんな簡単な話じゃないって事は、わかってるよ。でも、そのソウって奴も、俺達と同じように、政府の奴らにいいようにされているのであれば、黙っていられないって思うんだ」

レンジが照れくさそうなケンをなだめる。

「安心しろ、ケン。俺たちも賛成だ。見てみない振りは俺も好きじゃない」

昨日までとは少し雰囲気の違いに、みんな気付いていた。でも、言えばそんな気持ちに水を差してしまうのではないかと三人とも同じ腹積もりのようだった。

その時、少しだけ開いている天窓から入る物音に反応して、アッシュが右手で仲間に制止を合図する。ピタリと会話と動きが止まる。ゆっくりと外部のカメラに繋がっているモニターの前に移動してみる。

「なんだ、こいつら」

画面には、体の大きな男が二人映っていた。キョロキョロと辺りを見回しながら、何かを探しているようだ。熱反応を映し出す画面に切り替えて確認してみると、写っている二人以外にももう二人居るようだった。

「もしかして、こいつら、俺たちを探しているんじゃない……」

アッシュは部屋に顔を向けて言った。

ケンが画面を見て驚く。

「こいつ……昨日俺のこと捕まえた奴だ……間違いない、あの大男だ！」

それを聞いた三人は改めて画面に向かう。

息を殺して、男達の動向を見ていたが、どうやら建物の中まで押し入ってくる気配はなく、そのままゆっくりと離れていった。

レンジがわざとらしく汗を拭うような素振りで言う。

「そろそろ、ここもあぶねーな。まあ、大体にして、ここにずっと隠れていたからって、何が好転するわけでもないしな。どうしようか」

アッシュが物知り顔で言う。

「遠まわしに言わないで、はっきり言ったらどうだ？」

ケンの意味がわからず、レンジとアッシュの顔を見比べる。

「へへへ、ばれたか。じゃあしょうがない、はっきり言っけど」

リリが噴出しそうになりながら、代弁する。

「行きたいんでしょ？ ラウ・ジンのところに」

「正解！」

にかつと笑い、ケンに向き直る。

「ここにいて、悩んでたってしょうがないだろう？ 行く道はもう、決まったんだ。ラウ・ジンが一体何者なのかは俺もわかんないけどさ、でも、俺たち四人もいるんだぜ？ なんかあったら、なんとかできるさ、なあ？ アッシュ」

「俺に責任を押し付けるなよ、バカ。まあ、なんとか出来るかどうかはわからないけど、ここでさっきみたいな怖そうなお兄さん達に、いつ襲われるか分からない中で怯えてるよりは、僕も外に行きたいとは思っ、かな」

リリが改めてケンに聞いた。

「ケンはどう思う？ ラウ・ジンについて行くの、反対？ 賛成？」

ケンは首だけを下に向けて、意味ありげな数秒をわざと作ってから言った。

「大賛成」

顔を上げたその表情は、レンジも顔負けの、大きな笑顔だった。

「さあ、出かける準備しないと！」

第十六章

十六

「見る限り、怪しい男たちどころか、誰もいないんだけど」

ケンはその場で、くるっと回りながら周囲を確認してみた。

「これだけ人氣が無いと、奴らを見つけるのも簡単だけど、逆に見つかるのもあつという間って事だね」

そう言ったアッシュに頷き、気合の入った様子のレンジが言う。

「うつし。とにかく、向かうか」

大した荷物など無いケン達には、身の回りの物だけをまとめ、ラウ・ジンとの約束の場所に向かって、隠れ家を後にした。

昼前になろうというのに、地下の街は閑散としている。日の光の届かないこの場所で、朝だから動き出す、ということのメリットもないからだ。それに限らず、ここには無駄な道徳などはない。何が正しく何が正しくないかは自分で決めること。何をするのも、何をしないのも、自分で決めること。それがどんな結果になろうと、全てが自分の責任。誰にも迷惑はかけない、誰にも束縛されない自由と、誰にも甘えられない厳しさが裏表に存在する世界。これが、ここでのやり方なのだ。

先頭を歩くレンジはたまに後ろを振り返りながら、辺りを警戒していた。

「どうした、ケン」

何かを考えるように、伏し目がちに歩いていたケンは、その声に反応した。

「ああ、うん。俺、こんなことにならなければ、きっと地下に来ることなんか無かったんだろうな、って。知らないことばかりだな、って思ってたさ」

「まあ、そうかもなー。でも、何事も経験って言っただろ？ やっておいて損ってことなんか、なんもないと思うぜ」

と、首を後ろに倒して 目を細めて笑った。

「俺なんか、ここ来て、すぐ街を探検したんだけど、見たことも無いような食べもんとかあって、びっくりしたな」

「僕はこの汚さに戸惑ったよ、当初は」

肩を窄めて、本当に嫌そうな顔をしながらアッシュは言う。

「でも、非効率的な事を一切しないスタンスは、僕にも合うな、って思うこともあるし」

足を進ませながら、四人のPUREは思い思いの印象を話した。

「私、ここに来るまで、地下なんて本当にあることすら知らなかったんだけど、ここで育った子供達も、地上のことは知らないのかな」
誰もそれには答えられなかった。作為的に隔てられたこの世界にも、命が生まれ、育っていく。その命には、この世界は余りにも狭いのではないだろうか。もっと広い世界があることを、知らされてはいないのだろうか。

ソウと同様、選ぶことすら許されない、選択肢のない一本道。

「俺たちって、幸せだったんだなあ」

前を歩きながらレンジが言った一言に、ケンはやけに共感した。

ラウ・ジンの言っていた、A―三のシューターは、街の中心部から五分程進んだところにある。四人は、先ほどの男達に見つかることも無く、大通りに出る脇道で一旦様子を伺っていた。

「おお、さすがにこっから先は人が多くなるな」

路地から見える限りでも、かなりの往来がある。シューターへはこの大通りの反対側に渡るのだが、そこまで誰にも見られずに、と言うのは不可能だ。人が多いだけに、見つかりにくいだろうが、こちらでも警戒しづらい。

「さて、約束の時間も迫ってるし、躊躇してるわけにもいかないね。四人はさすがに目立つから、二人ずつ離れて移動しようか」

アッシュはそう提案して、すかさず続けた。

「んじゃ、僕とレンジは後から行くから、ケンとリリは先にどうぞ。」

リリ、シューターの場所は分かるよね？　そこで落ち合おう」

いきなりケンの顔が、ボツと音がする程の勢いで赤くなるのを見て、レンジは背中を向けて笑いを噛み殺している。それを知らない振りをするアツシユと本当に気づいていないリリは、場所の確認をし合っていた。

「万が一、変な奴らが二人に近づいて来ても、僕たちが後ろから見ているから、大丈夫」

「わかった」

「忘れないで、リリ。ここから先、何があっても、リリとケンは必ずコア・シテイに向かう事を最優先に考えて。いいね？」

「……わかった」

色々な意味の込められた言葉であることはリリにも分かっていた。分かっているから、しっかり返事をした。リリは、少しだけ肩に力を入れてケンの手を引いた。

「行こう、ケン」

突然手を握られて、びっくりしたケンだが、リリの真剣な横顔を見て、自分の軽薄な態度を恥じつつ、改めた。

「うん、行こう」

二人、雑踏の川に飛び込んだ。

ただでさえ、柄の悪い大人の多いこの街で、顔もわからない相手を警戒しろ、と言うのも無理がある話だ。誰もが自分達を狙っているように見えるし、誰もが無関心のようにも見える。いっどこから、手が伸びて肩を & a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まれないか、大きな声で呼び止められないか、という不安で一杯になりながら、二人は人の波を掻き分けて、振り返らずに進んだ。

「あんまりキヨロキヨロしすぎるのも、変だよね……」

不安そうなりりの声に、ケンは握られていた手を逆に握り返して言った。

「大丈夫、もうシューターはすぐなんでしょ？　このまま一気に行

「つちゃおう」

「うん。ここを真っ直ぐで着く」

足早に通りを抜けて、今までの混雑が嘘のように人気の引いた小さい空き地に出た。やけにひっそりしているが、この先にはシューターしかない、用がなければ来る事のない所だからだろう。

見るとラウ・ジンが笑顔でそこに立っていた。

「待ってたよ」

ケンとリリを満足そうに見ながら言った。

「早速だけどころか」

そう言いながら、側に置いてあった大きな黒いケースに近づいて行く。

「ちょ、ちょっと待ってよ」

早い展開に、少し焦りながらケンは引き止める。

「どうしたの？ そんなにゆっくりしている余裕もないんだ」

「レンジとアッシュも一緒なんだ。もうすぐそこまで来てるはず」

「ああ」

なるほど、といった様子のラウ・ジンはいつもの笑顔のまま言った。

「来ないと思うよ、彼らは」

ケンとリリはラウ・ジンの言った言葉を飲み込めずに呆けた。

「多分、大通りあたりで、地下の組織の奴に捕まったんじゃない？」
ケンの額に一気に汗が噴出した。

「おい、なんだよ、それ。なんでお前がそんな事。お前！ 何したんだよ、あの二人に何をした！」

ラウ・ジンは顔色一つ変えず、あっさりと言う。

「ごめん、ごめん。言っただけで無かったのは悪かったよ」

詰め寄ってくるケンを宥めるように、説明を始める。

「昨日、ケンがこの組織の奴に捕まっただろう？ でも、今日もそんな奴に着け回されたりしたら困るじゃないか。計画を台無しにされる訳にはいかないだろう？」

理解を求めるラウ・ジンと、不信感で一杯になったケンの目がぶつかり合う。

「だから、あの二人に何をしたんだって、言ってるだろう」

「ケン達と昨日別れてから、その組織に行って、レンジとアッシュのデータを置いて来たんだよ。ケンとリリの代わりに、政府が探してるのはこの二人だって、嘘の情報を流して標的を握りかえたのさ」

ケンはいまの事に声も出ない。リリは無言で、今来た道を足早に戻って行った。

「これで奴らの追跡は、ケンとリリからは離れるだろう？　その為さ」

ケンはここまで聞いて、怒りに溢れかえった気持ちを抑えた。そして、鼻の先まで詰め寄った距離を一步引く。それほどにケンの理解を超えた話だった。

いつも見ていたはずの友人の笑顔は、こんなに冷たいものだったろうか。

ケンはうまく息が出来ないような、胸苦しさを味わっていた。

ラウ・ジンは目的を果たす事しか考えていないのか？　その為なら、一切の犠牲と私情を見ない振りが出来るのか？　何も感じないのか……？

ラウ・ジンから目を離すことも、沢山あるはずの言いたいことをうまく口にすることも、できずにいた。

そこにリリが走って戻ってきた。

「ケン、いない、レンジもアッシュも、ここから見えるところにはいない！」

ケンはハツとして、振り返る。

「大通りまで戻って見たんだけど、どこにもいないの。レンジは背も高いし、居れば見つかるはずなのに」

リリは、言い終わるやいなや、ラウ・ジンの方にズンズンと向かっていく。

「ちよつと！　あの二人はどこに連れて行かれたの？　知ってるん

でしょ？ 教えてよ！ねえ！」

ラウ・ジンはどこまでも冷静に答えた。

「奴らのアジトはわかるよ、昨日行ったからね。でも、今から助けに行くわけにはいかないでしょ？」

「行くに決まってるじゃない。どこなの！」

「今から？　じゃ、コア・シティには行かないつもり？　今日を逃したら、また数カ月チャンスは無いんだよ？」

リリは電気が走ったように、ビクンとして体が止まった。

忘れていた訳じゃない、大切な目的。

わかつている。行かないと。でも！

リリの様子を見たケンはリリに駆け寄る。

「リリ……！」

「……ケン」

振り向いくリリの表情は、ラウ・ジンへの怒りから、徐々に視線の定まらないような、ぼんやりとした目になっていく。

「さっき、アッシュが言ったの……。何があっても、ソウに会いに行け、って……」

ケンに顔を向けたリリの目には、今にも頬に零れそうな涙が溜まっていた。

「私、約束した……。『わかった』って」

悲しい涙ではない。苦しい涙。

ケンにも、その約束の意味がわからないわけではない。こういう事態が、ありうるからこそそのメッセージだということも。

ケンはリリの目に頷いて、側で肩を竦めて立つラウ・ジンにきっぱりとした声で問う。

「どうやってコア・シティに行く計画なのか、説明してくれ」

一瞬面食らったようだったが、すぐにニコリと笑ってその「UV」は言った。

「もちろん」

第十七章

十七

ヴィカは、手元にあるデータを、目の前で横たわる二人の少年と見比べていた。二人とも手足を縛られ、身動きは取れず、ケンの時の様に、引き摺られて連れて来られたのか、体中がボロボロに擦り切れていた。

「確かに、データのPUREに間違いのないようだね」

運んで来た大柄な男四人は、代わる代わる自分のお手柄とばかりに、その経緯を口走っている。

「ヴィカ様に言われたとおり、大通りで待ち伏せてたら、まんまと二人揃ってノコノコ来ましてね」

「チヨロいもんでしたぜ」

昨晚、突然訪れたLUVの少年の情報を聞いたヴィカは、半信半疑のまま、手近にいた男達に言われたとおりの場所を見張らせていた。そして、その通り引っ掛かった、と言うわけだ。うますぎる、という気がしないわけではない。

「喋れるようにしておやり」

ヴィカがそう言うと、そこにいた男達が、レンジとアッシュの体を起こし、口に挟まれた布を解いて、また乱暴に地面に倒した。

「お前たち、何でここに連れてこられたか、見当は付いてるんだろうね」

先程まで、口を縛られていたのが息苦しかったのか、二人とも荒い息を繰り返していた。

レンジは辛うじて答えた。

「はあ、はあ。さあな、俺たちがPUREだからってところか？」
「近からず遠からず、と言ったとこだね。安心をし、すぐに殺したりはしない。大切なお客様だからね」

二人は、少しずつ状況が見えてきた。昨日ケンを捕まえたのは、

こいつらの仕業であろう事、こいつらがPPPを狙っているであろう事。しかし、どこまで知っているか分からない以上、多くは語らないほうが良いと感じていた。

アツシユはしきりに辺りに目を動かし、逃げ場はないかを探していたが、広い建物のほぼ中央に連れてこられている為、どの出口も不意を突いて逃げるのには遠すぎた。

楽しそうに笑みを浮かべながら、アツシユの頬を優しく撫でる。

「お前、さっきから出口を探しているようだけど、決して逃がしはしないから、安心して捕まっているといい」

触る手を、大袈裟に嫌がつて上目使いにアツシユは言った。

「そう。なら、地面に転がつて汚れたから、シャワーと着替えを用意してくれるとありがたいけど」

「あはは。言うことは立派だね。まあ、泣かれるよりはマシだ」

自由に動かない体をくねらせ、顔を上げてレンジは聞く。

「俺たちを捕まえて、あんた達の目的はなんなんだよ。それくらい教えてくれよ」

「知りたいなら教えてやろう」

ヴィカは機嫌の良さそうな顔を、少し歪ませて言った。

「ひっくり返してやるのさ」

「あ？ ひっくり返す？ 何を？」

「この世界そのものさ。この間違った世界をね」

レンジはヴィカの話す先に、素直に興味を持った。

「世界を……？ なんだあんたが？」

「私はね、この地下で生まれて育ったんだ。物心ついたら、母親と二人、ここで、まさにこの工場で働いていてね。父親はもういなかった、必要もないから、なんでいないのかも知らないけどね。来る日も来る日も働いて、食べるもんを買う。その繰り返し。それが普通だと思っていたよ。生きるって事は、こういうことだと思ってた。不思議にすら思わなかった。母親が倒れるまではね」

ヴィカは、この工場に昔から置いてあろう作業台に手を付いた。

「働きすぎさ、あつさり逝っちゃったよ。知ってるかい？　ここにはね、医者はいないんだ」

「医者がいない！？」

レンジは目を丸くして驚いた。

「それでも法外な値段で薬を処方するヤブ医者みたいなのはいるけど、そんな金持つてるのは、あくどいことやって儲けてるような奴だけ。まだ十にもならない子供の私なんか、もちろん追い返されてね。その時は、これもしようがないことだと思ってたんだ。貧乏人は病気になったら死ぬしかないってね……」

小さく、奥歯を噛む音が聞こえた。

「地上があることは、やはり知らされずに育つのか……？」

「ここじゃ、上の話するのはタブーとされている。それでも薄々気づいてくるのさ、大人になるにつれてね。でも、その存在に気づく頃には、皆この生活に心底染まりきった後だから、誰も抜け出そうとしない。知らない振りをしているほうが利口だと気づくからさ。変な劣等感を持ったところで、自分が嫌な思いをするだけだ、とね」

例えようのない絶望の未来。

見上げることのない空。

「私だつてそうさ。何も知らずにいた。目に見えるものだけが現実の全てだと思ってきたんだ……。母親が死んだとき、そのヤブ医者が『上なら、こんな病気じゃ死ぬことはないのに』ってぼろっと言っただけ」

今まで周りに意識を巡らせていたアッシュも、思わずヴィカの話に引き付けられて聞いていた。

「でも、私は諦めるなんてごめんなんだよ！　誰にだって可能性を持つ権利はあるはずだ。地面で隔てられた二つの世界を、自分の力で乗り越えるチャンスをね。そして政府の奴らに思い知らせてやるんだ。道を閉ざされる暗闇。そして、選ぶことのできない悲劇を」

ヴィカは瞳に抱える真つ赤な炎に、油を注がれたような顔を向け

る。

「私は必ずひっくり返してみせる！」

レンジもアッシュも、ヴィカから溢れ出す覇気に触れていた。この世界の常識を変えたいという。誰もが、見てみぬ振りをし続けた世界の隔たりを。それは、ただの野蛮な野心ではない、強い信念と確固たる想いがあるような。

「お前たちは、やっと手に入れた好機さ」

ヴィカは寝転がる二人の顔の前に膝を付き、わざと声を落として言った。

「お前たちには、なんの恨みがあるわけじゃないけど、政府への餌に使わせてもらう。悪く思わないでくれ」

レンジもアッシュも、ヴィカの確信めいた言い草を訝しく思っていたが、次の言葉ですぐに意味を理解した。

「どちらがPPPなんだろうねえ。コア・シティの奴らが調べないと分からないらしいが。まあ、そんなのは構わないさ。両方捕まえておけば、間違いはない」

二人は、ピンときた。

勘違いしている。

自分達を、政府から追われているPUREだと信じ込んでいる。何故だかは分からないが、しかし、それはこの最悪に見える状況の中で、唯一と言っていい好材料だった。

ケンとリリは無事だ。

レンジは自分に背中を向けて横たわるアッシュを、ごく小さな声で呼んだ。それを耳で捕らえたアッシュは、周りに気づかれないように、そのままの体勢で首を縦に動かした。二人には、それだけで今すべき事は了解しあえた。

「お前たち、この子達を奥の部屋に繋いでおきな。見張りを必ずつけておくんだよ」

うい、と男達が二人を運ぼうと歩んでくる。

さすがに、縛られたままではレンジもアッシュもなす術がない。

レンジが唯一自由の利く口を使ってあがく。

「やさしく運んでくれよお？ 体中痛いんだからさあ、俺たち人質だろう？」

少々わざとらしいレンジに、アツシュは一人溜め息を漏らした。あまり自分達の先行きは良くないが、とにかく、ケンとリリをソウに会わせるには、今は大人しく捕まっておくべきだろう。PPPだと思われているのなら、命を取られることもない。ひとまず、ここは言われるままして、後から逃げ出すチャンスを伺うつもりだ。なにせ、この二人でコア・シティからも脱出できたのだから。

二人が腹をくくったと同時に、新たな男達の声が建物に響いて聞こえた。二人の体勢では、声の主達を見ることが出来ないが、会話の様子から、仲間なのだろうとわかった。

「今頃手ぶらでお戻りか。お目当てのPUREは俺達がちゃんと呼まえてきたぜ、この役立たず共め」

その声に、今戻った男達は愚痴る。

「聞いたぞ。お前たちはヴィカ様から新しい情報をもらってたそうじゃないか。偉そうに言うな」

「負け惜しみか。お前たちだって、ガフがいたじゃねーか」

仲間達の輪の一番後ろにいたガフは、決まり悪い表情で苦笑いをしていた。

「こいつがいれば、楽に見つかると思ってたら、とんだ間違いさ。なんの役にも立たねーし、腹が空いたしか言わねーんだ」

どつとその場にいた男達が笑い声を上げる。

その内の一人がガフに言う。

「どうした、ガフ。先に自分の獲物を取られてそんなにショックか？それともただのお荷物だったのが恥ずかしいのか？」

また、豪快な笑いが起きる中、ガフは体に似合わない小さな声で言った。

「おかしいなあ……」

「何がおかしいんだ。おかしいのはお前の胃袋だろう？」

馬鹿にされる声も聞こえていないように、ガフは不思議そうな顔で呟く。

「これ、どっちも俺の捕まえたPUREじゃ……ないと思うんだよなあ……？」

レンジとアッシュは二人とも、しまった。と体が反応してしまった。昨日ケンを捕まえた男がいるかも知れないことを、予測することまではできていなかったのだ。

その様子を、少し離れたところにいたヴィカは見逃さなかった。

「ガフ。お前が昨日捕まえたPUREと、この二人はどちらも違うつていう事かい？」

ガフはすぐごとヴィカに近づき、レンジとアッシュの顔を覗き込みながら言った。

「あい、ヴィカ様。おいらが捕まえたのは、もっと小柄で、弱そうな奴でした」

「間違いないね？」

ガフは小刻みに何度も、首を縦に振った。

ヴィカは、二人を奥に連れて行こうとしていた男達の前に、立ちはだかるように進んで言った。

「どうやら、少し話しが違うようだね。PUREはお前たち以外にもいるってことか……？ さては！ お前たち二人は囿ってことかい？ くっそ！ そっちがPPPか！ どこだ、どこにいる！」

その激怒する表情は、女とは言え、何人もの男衆を束ねるだけの凄みがあった。紅い瞳が燃えるように睨み付ける。

「よく聞きな。私はね、『知らない』って言う事が、何より嫌いだんだよ。怒らせない内に言うのが利口だよ」

返事を待つが、二人は答えるどころかピクリともしない。ヴィカはしゃがみこみ、刃物のように研ぎ上げた爪を立てた。長い爪は、レンジの首筋に舐めるように這いながら細い血の跡を残していった。「くっ、痛いってー！ 何の話だよ！ 俺たちにはさっぱりわかんねーって！」

「そうかい。何も知らないのは、こっちの坊ちゃんも同じかい？」

足でアッシュの体の向きをわざとレンジの首もとが見えるようにしてから、ヴィカはもう一度聞いた。

「私はね、長い間この時を待っていたんだ。お陰で、もう待ちくたびれちゃってねえ。気が短くなってるんだよ」

ヴィカの鋭い爪が、レンジの動脈の上に置かれている。アッシュの目は、見たくなくてもその先に釘付けになってしまう。

「PPPの可能性があるうちは、命は取られないとも思っているのかい？ 残念だけど、私はギャンブルが好きでねえ。アースが上をふっ飛ばすかどうか、ワクワクしながらお前たちを少しずつ弱らせていくのも、楽しいだろうねえ」

周りの男達が、耳障りな声で笑っている。ヴィカはその間もレンジの喉に爪を這わす。

「私にはアースなんて怖くもなんともない。お前たちを生かしておくかどうかなんて、その程度のことさ。さあ、どうする！」

ぐっとヴィカの指に力が入る。堪らずアッシュは声を上げる。

「ま、まて！ 話す、話すから、その手をどける！」

悔しさと痛みでぎゅっと絞った目を、ゆっくり開けてレンジはアッシュを振り返った。

「だ……だめだ！ 言うな、バカ！」

「バカっていうな、バカ。逆なら同じことするさ」

冷たい笑いを溜めながら、ヴィカは指を離し、その先についた血をアッシュの額に擦り付ける。

「さあ、教えてくれ。仲間のPPPはどこにいるんだい」

アッシュの口が開きかけた時だった。

「ここだよ！」

その声は、影の重なり合う、目を細めるほどの暗い物陰から聞こえた。

第十八章

十八

その声は、まさしくケンのものだった。二人はその姿は見えないが、間違いなくケンの声を、この建物の中から今聞いた。

「レンジ、アッシュ！ ごめん！ 俺、二人を置いてコア・シティには行けない！」

一歩ずつ、その姿を明るみの中に現わす。震えて収まる様子の無い足を、バレないように踏みしめながら。

「あの、ばかつ……」

レンジは必死に首を上げてケンの姿を見つけようとしていたが、その力を抜き、頭をガクンと地面につけた。

「もしかして、探す手間が省けたって事かねえ？」

面白そうにその声の方を見やりながら、ヴィカは立ち上がる。

他の仲間たち同様、成り行きを見ていたガフが、突然大声で喚く。「ああ、こいつ！ おいらが昨日捕まえた奴ですぜ、ヴィカ様！」

距離を置いてこちらの様子を見る続けるケんに、ヴィカは腑に落ちたという表情で話しかける。

「お前が本当の政府のお尋ね者かい」

ケンは、ぐつと顎を引き、睨み付けるような瞳を見開く。そして、思いつきり大きな声で叫んだ。

「お、俺は……。俺は、PUREだ！ その二人を、返せ！」

一瞬、しんとしたすぐ後。

「あははははは！ PUREだからなんだというんだい。お前みたいな、小僧がひとりで何するつもりだい？」

ヴィカは首を仰け反らせて言った。つられて、男達もからかうように笑う。

「うるさい！ 俺だって、先に進んでみせるんだ！」

「先に進む？ どこに行くっていうのさ」

ヴィカは、既にこの少年は手中にあるのと同然と言わんばかりに、余裕の様子でケンにわざと話させる。

傍から見れば、虚勢を張っているようにしか見えない、明らかに不利でしかないこの状況の中で、ケンはただ一生懸命訴えた。

「俺も、一昨日まで何にも知らなかった。地下にこんな街があることも、アースの事も、そして自分自身のことも」

ヴィカは、ケンが『俺も』と言ったことで、さっきの話を聞いていた事を察した。

「俺はあんたと違って、全部知らなければ良かったと思ったよ。知らないで済むなら、その方が幸せだって、そう思った。でも、もう一つはあんたと同感だ。世界を知る可能性を持つ権利は、誰にでもあるべきだ、って」

不意をつく言葉に、つい興味を惹かれる。

「ほお？　それで、お前は何をする？　事を知り、選べる道があるお前は、どこへ進む？」

ヴィカの試すような問いかけに、ケンは戸惑う事無く答える。

「どれが正しいとか、どれが間違ってるとか、そんな事は俺にはわからない。俺はただの高校生で、成績だって普通だし。でも、わかんないから、わかんないからこそ、怖いとか、面倒とか、そういうことに惑わされない、本当に自分がしたいと思ったことを、するよ」

その先は、レンジとアッシュに向かって言った。

「だから、今は、コア・シティに行くことより、二人を助けることの方が優先なんだ」

レンジは、横たわったまま目をつぶり、天を仰ぐ。アッシュは、苦笑いのまま、また溜め息を漏らした。

ヴィカは単純に疑問に思う。

「お前たち、コア・シティに一体何をしに行くつもりだい？」

今、一番このPURE達が近寄りたくないはずの場所に、何の用があるというのか。

「自分達の手で、終わらせる為に」

「終わらせる？ まさか…… コア・シティに、乗り込む気かい？」
「そうさ。馬鹿げた話だと思うんだろ、そう思っていればいいさ！
でもな、俺たちは本気だ。自分達の未来は、自分達で変える。変えてみせるんだ。変えられる可能性があるんだから！」
自分の気持ちを精一杯込めた言葉は、ケンの息を荒くさせ、気づかぬうちに肩も揺れる。

ケンの言葉に、聞き入る風になっていたヴィカが、その思考を消し去るように凄みを利かせた声をあげる。

「分かっていないみたいだねー、自分の立場が！ お前はもうどこにも行けやしないさ。お前に未来なんてないって事だよ！ お前たち、その坊やをとっ捕まえな！」

その声を聞いた周りの男達がニヤニヤと笑いながら、ケンに近づいて行く。

ケンは周囲を睨み返すが、じりじりと囲まれていく。何度も後ろを振り向きながら、少しずつ後ずさるしかない。

手に持ったロープをプラプラとさせながら、ガフも歩み寄る。

「ぐふふ。今度は逃がさないからなー」

忘れることの出来ないこの顔。昨日の恐怖と、今湧き上がるこの憤りで、ケンは自然に眉間に力が入る。

「へへへ。逃げ場はないぞー、外にも仲間が一杯集まってるからなー」

ガフがまた一步、足を踏み出したときだった。

建物の外から、何かモーターのような動作音が聞こえる。

レジスタンスのアジトになっているこの大きな元工場は、建物内に間仕切りが殆どない為、音がとても通る。その次第にこちらに近づいている聞きなれない機械音も、そこにいる誰の耳にも届いた。そして、それが何かしらの異常を知らせていることに、皆動きを止める。

ヴィカもその音のする方に顔を向け、不審がる。

「……なんだい？ この音は」

外にも仲間はいるはずだが。男の一人が、外を確認しに出入り口に向かう。

ケンには依然立ちはだかる男達に、隙を見せないように気をつけながらも、その行く先に視線を這わす。そして、一人、唇をクツと噛み締め心の焦燥を抑えようとする。

音はいくつも重なり合いながら、次第に大きくなりながら近づいてきていた。もうそれは、建物のすぐそこにいるように聞こえてくる。

この近くには、自分達以外には誰も寄り付かないことは、ヴィカ達が一番良く知っている。訝しがるヴィカの視線を背中に受けながら、男が外へ出る金属ドアを開けたときだった。

シュンツ。

扉を開けた男は、その場所で仰向けに倒れていた。

その様子を見ていたヴィカと男たちは、そのモノの速さと予想だにしていなかった展開に、反応しきれずに成り行きを見ているだけだ。

それは、この地下には一切ないはずのエア・バイクだった。空気を吹き上げて移動するこのバイクは埃だらけのこの街には、不適切極まりない為に、一切広まらなかった。

その無いはずのエア・バイクがざっと二十前後、次々と倉庫内に入ってくる。すぐに数台のバイクが倉庫内を低速で移動しながら現状把握を始める。やけに統率の取れた動き。事前にしっかりと指揮が執れている様に見える。

扉を開けた男をなぎ倒したエア・バイクには、背が高く、ガラスの様な目をしたLUVが乗っていた。

「お前たちは！ まさか……！」

ヴィカは、驚きと腹立たしさで歯軋りをする。彼女には、相手が誰で、何の目的なのかということは概ね理解できていた。

先頭にいた男が、バイクに乗ったまま、少し高い位置から言う。

「お前が親玉か。ここにPUREがいるだろう、こちらに渡せ」

聞いていたレジスタンスの男達は、乗り込まれた事でかつとなっている。ヴィカが声を上げれば、すぐにでも飛び掛るつものようだ。ちらほら聞こえる怒声が、緊迫感を煽る。

「挨拶もなしに、随分な態度だねえ。人の家に勝手に上がりこんでおいで、その言い方は野暮なんじゃないのかい？」

迎え撃つ準備はいつでも出来ているのか、ヴィカの物言いからは怯む様子は伺えない。

「素直に従うとも思っていたかい？ なぜここが分かった。誰が垂れ込んだんだい。教えてくれてもいいだろう、政府の役人さん？」

そこまでを、固唾をのんで聞き耳を立てていたレンジとアッシュは、ヴィカの発した言葉に飛び上がりそうになる。縛られているから、僅かに体が揺れるだけではあつたが。

「隠す必要もないだろう。我々はI A A、政府管轄の部隊だ。特別命令で地下にきている。ここに我々の探すPUREがいるという情報が入った。そのPUREさえ渡せば、我々はそれ以上の争いを起こすつもりは一切ない。しかし、遂行が妨げられれば、何をしても構わないという許可も出ている。状況が理解できたら、速やかに該当者を引き渡してもらいたい」

「大事なことをお忘れのようだね、お役人さん。ここは、『地下』だ。命令だの許可だのは、ここじゃ無いも同然。誰もそんなものは怖くもなんともないんだよ。それに、ここに上の人間がいるつてばれようものなら、あつという間にそこいらの荒くれ物が山ほど集まってくるよ？」

レジスタンスの男達は、悪趣味な笑い声を上げながら、各々の手に荒々しい武器をもてあそぶ。

バイクに乗る男は顔色一つ変えていない。簡単な取引になるとは思っていなかったということか。その後ろに控える部下である男が小声で問う。

「シュリ様、三名のPUREを確認しております。ご指示を」
シュリと呼ばれるその男は、一度ゆっくり瞬きをして辺りをぐる

つと見渡す。床に転がる二人の少年。もう一人は死角にいるのだろう。その様子をヴィカも見ていた。ほんのちらっと、ケンのいる方向に目だけを動かす。

「では、我々の要求を聞き入れない、と解釈してよいのだな？」

年頃の女性としてみるならば、美しいという賛美を受けるに違いないその顔に、わざとらしく笑みを浮かべて言いのけた。

「どうぞ、ご自由に」

シュリとヴィカの目が静かに触激した。政府側は人数では圧倒的に不利ながらも、エア・バイクという飛び道具は攻防に圧倒的に有利になる。レジスタンス側は、自陣営内であることで、数と力で分がある。どちらも、負ける気などない、という様相だ。

「障害を排除し、PURE三名を奪取」

「お前たち、お客様の相手をしており、手加減はいらないよ！」

それぞれの掛け声が、戦いの合図かの様に、向かい合った交戦体制の男達は動き出す。

反響する館内、怒声、金属のぶつかり合う音。蹴飛ばされ、引き摺り下ろされ、床に突っ伏し舞う土埃。今まさに始まった攻防戦は、目の前で繰り広げられている。

それを避けながら、レンジとアッシュは、目立たないように転がり移動する。どうせこの格好では逃げられないと思われるからか、この二人を見張っていた男達も大声を上げて戦陣に加わっていた。

「おい……。これ、一体どういうことだ？」

レンジはアッシュにまず発する。

「僕だつて知りたいよ。なんでIAAがこのアジトまで来たんだ？いくらなんでも早すぎる。僕たちがここに来たのだって、ほんの一、二時間前だろう？ それなのに政府の部隊がもうここにいるなんて」

「あの女親分が言っていた。『誰が垂れ込んだ』って。誰かが密告

したんじゃないか？」

大きく鼻から息を漏らすレンジ。と、はっと気づいた。

「そんなことより、ケンは何？」

やっとのことで体を起こして探してみるが、その姿は確認できない。同じ建物内とはいえ、ケンと二人の場所は離れていて、声こそ聞こえたがその姿は先程から見えていなかった。

「まさか、捕まってるなんか、いないよなあ……？」

心配そうなレンジの声にアッシュは軽く睨む。

「心配するくらいなら、助けに行くこと考えないと、だろ？ 早く、後ろ向いて。まず僕がレンジの縄ほどくから！」

だな、と苦笑いして素直にアッシュに背中を向けようと振り返ると、焦点が合わない。すぐ目の前に壁。

面食らう。

いや、壁のはずが無い。次第に見えてくる実体。それは大男、ガフが屈んでこちらを見ている姿。

「わああ」

気がついた途端、レンジはお尻を滑らせ後ずさる。

「お前たち、逃げようとしてるなー？ 見つけたぞー。だめだー、また俺が怒られるじゃないかー」

あちゃー、と目をつぶるアッシュ。

「あっちの鉄柵に繋いでおこう」

ガフにかかれば、少年二人を担ぐことなどは造作もない事。腰を屈めて持ち上げようとした所で、それは上から降ってきた。

ゴン。大男の顔が地面にのめり込む。

「ぶはっ。こいつ今日も地面とキスだ」

驚く二人は、何事かと顔上げて二度驚く。

「ケン！」

それは、エア・バイクで大男の顔を踏んづけたケンだった。

「お前！ 捕まってるなかったのか！ どこにいたんだ？」

「心配かけてごめん。大丈夫だった？」

バイクから飛び降り、二人を縛り上げる縄を解きながら、ケンは口早に説明する。

「これ、全部俺たちが仕組んだんだ」

「仕組んだ？」

「二人がレジスタンスに捕まったのは、ラウ・ジンのせいだったんだ。あいつが、俺とリリを間違はなくコア・シティに連れていく為に、こいつらの矛先を急遽レンジとアッシュに向けさせたんだ」

アッシュは納得した表情で言う。

「なるほどね。だから、彼女は僕達をPPPだと信じ込んでいたのか」

ケンは頷く。

「でも、俺はそんなの許せなかった。二人に身代わりをさせて置いていくなんて」

ケンはすまなそうに言った。

「だから、コア・シティには行かなかった。約束破ってごめん」

「気にするな、ケン。謝ることなんか無いだろう。俺たち、助けてもらったんだぞ？」

そう言うレンジは、縄が解けて、今まで締め付けられていた部分を痛痒そうにさする。アッシュも同意する。

「そうさ、礼を言わないといけなくらいさ。でも、これを仕組んだってどういうこと？」

「ああ。ラウ・ジンを脅して計画を考えさせた」

面白そうに笑うケン。

「詰め寄ったんだ、お前のせいなんだから何とかしろって。そして、俺にここに来て、なんとか時間稼ぎをしてろって。必ずここが騒動になるようにするから、それを利用して逃げろって」

まさか、という表情で驚くアッシュ。

「政府に密告したのは、ラウ・ジン？」

「俺も初めは、訳がわからなかったけど、どうやらそうらしい。この混乱はラウ・ジンの仕業みたいだ」

「何者なんだ、ラウ・ジンって奴は」

ケン は肩を窄めて答える。

「ま、とにかく、こいつらが揉めてもらってる内に逃げない！」
レンジ がケン を制する。

「でも、ケン。お前のそのエア・バイクはどうしたんだ？ 大体、
一台じゃ三人逃げられないし」

そのレンジの横顔に一つ陰が被る。

「一台じゃないよ、レンジ」

レンジ は声の主を見て笑う。

「リリ。お前も来たのか」

リリ は体中砂だらけだった。

「私だって、二人がいなきゃいやよ」

頬についた泥を手の甲で拭きながら言う。

ケン がここに潜り込んでいる間に、リリ がバイクを地上から運んできていた。一台のバイクに乗り、もう一台を運ぶのは大人の男でも力を要す。

きつと何度か転倒したのだろう。

恥ずかしそうに笑ってから、意識して真顔にもどす。

「早く乗って。見つかる前に、ここから脱出しないと。間に合わなくなっちゃう」

「間に合う？ 何に？」

レンジ が聞く。

ケン がアッシュ を後ろに乗せて、アクセルを吹かしながら答える。

「コア・シティに決まってるだろ？」

シュリ はワイヤレスマイクで部下に指示を出しながら、戦況を見ていた。

どんどん増えてくるレジスタンスの数が多すぎて、スムーズに鎮圧が出来ない。しかも動き回る度に舞い上がる砂埃と、元々の薄暗

がりのせいで、PUREの居場所すら把握仕切れていない。

「全く、視界が利かない。なんて暗い場所だ」

シユリは愚痴る。このスクラップ・エリアは特に明かりの少ない地域ではあるが、ここに来るまでの間も、真昼間とは思えない暗さに多少なりとも驚きを感じていた。

シユリは地下のエリアに来るのは初めてであつた。普段から、住人には内密に設置されている監視カメラや、資料などで内部の一部始終を把握していたつもりではあつたが、実際に来て見るのとは、違うものだった。

「よく、こんな世界で生きているものだ」

同情にも似た気持ちが口をつく。しかし、そんな思考はすぐに切り替わる。マイクに向かつて指示をだす。

「動きの取れるものは、隙を見て該当PUREの居場所を確認しろ。報告せず確保で構わん」

ヴィカは常日頃から鍛えた体で、縦横無尽に動き回るバイクから男たちを引き摺り落したり、低空飛行するものには飛び掛つたりして奮闘していた。

「お前たち！ 日頃の鬱憤、思いつきり晴らしてやりな！」

側にいる男達は、声を上げ奮起する。

また一台、ヴィカの前にバイクの陰が現れる。すばやく一度横に避けてから、すぐ後ろに回りこみ、飛びつきバイクに乗り込んだ。交戦しつつも運転する男の首に腕を回す。バイクは右往左往しながら進み、その後ろでヴィカは高々と笑い声を上げていた。そのヴィカの視界に入ったもの。

エア・バイクに乗って逃げ出す少年達。

瞬間、後を追おうと体が動く。しかし、ヴィカにはこのバイクを運転する術は分らない。もちろん降りれば追いつけるはずも無いだろう。ヴィカは男の首を締め付ける腕を緩め、トンと地面に飛び降りる。気道を押さえられていた男は、咳き込みながらその場を離

れて行つた。

ヴィカは追いかけるべきPUREの少年達の姿を目で追う。他にすべきことがあるだろうと、頭では分かっているが、力が抜けてしまつて呆然と見送っている。そして、自分に言い聞かせるように呟いた。

「あんな子供が、政府に楯突こうなんて、面白いじゃないか」

ヴィカは、自分が以前灯したモノ、心に燦らせたモノに似た何かを、ケン達が体のど真ん中に燃やしているように見えた。だからだろうか。

「あの子らがどこまで出来るか、高みの見物でもさせてもらおうかね」

ヴィカは、何かを期待するような気持ちで、その姿がこの倉庫から出て行くのを確認し、また向かつて来た政府のバイクに飛び掛つた。

第十九章

十九

「で、これからコア・シティにはどうやっていくんだ？ ラウ・ジンはどうした？」

レンジは走りながら質問する。先程のアジトからエア・バイクで逃げ出してきた四人は、人目の多くなる手前で、バイクを捨てて走っていた。息を切らせながらも、ケンは言う。

「ラウ・ジンを待たせてるんだ、とにかくそこに行かないと」

四人は当初の約束の場所であった、A・三シューターについた。

「もう、限界ギリギリ、早く早く！」

ラウ・ジンが手招きする。いつもの笑顔も曇り気味だ。きっと内心は焦ってる様子の彼にケンは意地悪を言う。

「お前が変な気を回して二人を捕まえさせたりしなければ、こんなことにはなっていないんだからな。自業自得だ、なんとか間に合わせろ」

「わかってるよ、だからここまで荷物の発送を遅らせたんじゃないか。大変だったんだぞ、ありもしない事故を装って、新しい車を手配するってことにしてさ。全てのデータの改ざんは手間かったよ」初めて見る友人の慌てぶりに、ケンは思わず噴出す。

「はいはい、分かったよ。で、これに入ればいいの？」

ケンはラウ・ジンの後ろにある黒いケースを指差した。人が二人寝て入れるくらいの大きさだ。

そのケースを見ながらアッシュが言う。

「時間がないって事だけはわかったんだけど、大雑把でいいから、どうやってコア・シティに入るつもりなのかだけ教えてくれない？」

ラウ・ジンが早口で答える。

「簡単な事さ。今からこの箱に入ってもらおう。僕が地上に持って行って、待機してる車に乗せる。その車は、コア・シティ、しかもI

「A Aの施設の中にこの荷物を運ぶ。だからあとは寝てるだけでつくよ」

レンジが次に聞く。

「俺もコア・シティの事は詳しくないけど、荷物も中身をチェックされるんじゃないのか？ 中を確認されたら、それこそ入り口で捕まっちゃうのか？」

「あー、もう。と地団駄を踏みながらラウ・ジンはもっと早口になる。」

「当然の質問だけど、これを答えたらすぐ箱に入ってね、本当に時間が無いんだ。うんとね、I A Aの施設では、公にできないような実験や調査、例えばPUREの子供たちの検査のような、そういう水面下でしか動けない事をしている。だから、そこでは通常なら使わないような薬品も必要になることがあるんだ。例えばこれ」

ラウ・ジンは積み上げられたケースの中の一つを開けて、透明な液体の入るボトルを取り出して見せる。

「ただのミネラル・ウォーターに見えるでしょ？ でも、これを飲んだら、三分以内に痛みも苦しみもなく、ゆっくりと心臓が止まる薬剤が混入されているんだ」

レンジに手渡されたそのボトルは、蓋が開けられている形跡はない。まさに新品の状態である。思わずレンジはアッシュにボトルを投げ渡す。

「飲んでみても無味無臭。しかも死体から毒物反応でもないし、この水も、空気に触れると次第に薬物は中和されて、検出不可能になる。まさに、一切痕跡を残さず、しかも本人自らの手で毒殺を行える魔法の水」

あからさまに苦い顔をしている四人に、ラウ・ジンは事もなく続ける。

「こういうのは正規のルートで作ったら問題あるだろう？ でも、地下ではなんでも作れる。だから、証拠を残したくないような薬品は、地下で作らせる。そして、数ヶ月に一度、そういうのを一度に納品

させるのさ」

「それが今回の荷物ってことか」

アッシュが頷きながらケースに足を入れる。

「そう。だから、この荷物に関してのみ、一切のチェックが免除されている。逆にされたら困るんだ。わかった？ オツケー、じゃ閉めるよ」

なんとなく流れて、レンジとアッシュが先に一つのケースに入り、その蓋をラウ・ジンが閉めた。箱の中からは、蹴るな、そっちいけ、と二人の掛け合いが聞こえる。

「んじゃ、二人で入って。スペースの問題でもう一つ分しか空けられなかったんだ」

「う、うん」

ケンハ、赤くなる自分を戒めながらリリを見る。

「さ、さきにどうぞ」

「うん、わかった」

そういつてケースに収まったりリリの顔も少し赤くなっていたが、半パニック状態のケンには気づくことすら出来なかった。

蓋を閉めようとするラウ・ジンにケンは聞く。

「おい、ラウ・ジン、お前はどうかやって？ もう空きはないんだろ？」

大丈夫、と殆ど閉まった蓋の隅から、後で。と言い残し、完全にそれは閉じた。

ケンもリリもどうするつもりなのだろう、としばらく話していたが、シューターで地上に運ばれ、更に車の中に運び込まれる衝撃と振動で、その続きは消えていった。

車の中に入られると、外部からの明かりが遮断され、何も見えなくなるので、ケンにとってはありがたい状況だった。車が揺れるたびに、隣に寝そべるリリの体にぶつかってしまふのを、その都度謝っていたが、それも十回を数えるくらいになると慣れてしまった。ケンは沈黙を破ってリリに話しかける。

「リリ、怖くない？」

「ん？ ー。怖くないわけじゃないけど、とうとう、っていう感じのほうが強いかな」

「すごいな、リリは。俺なんてうまくソウのところまでたどり着けるか、自分にできるかどうか、心配でしょうがないよ」

笑い交じりに、ケンは言った。

「私だって、自信はないよ。でも」

リリは一呼吸置いて続けた。

「一人じゃないもん。ケンがいる。レンジもアッシュもいる。一人だったら、絶対私ここまで来てないし、勇気出なかったと思う。でもさ、同じように苦しんだり、悩んだり、追い詰められたりしてる仲間と、抜け出してみようって、やってみようって励ましあえたでしょ？ きつとこれって、前に進む為のゴーサインだったんだと思うの」

「ゴーサイン？」

「そう。行きたい方向は決まっても、信号が赤なら進めないでしょ？でも、私には信号を青にしてくれる仲間がいた。青信号は、進めって小さいころ教えてもらわなかった？」

笑いながらリリは言った。

「ねえ、ケン？ 私とケン、どちらがPPPだったとしても、それは私たちが決めた道じゃない。でもね、ここから先は、私たちが決めた道。選んだ道。だから、自信はないけど、迷わないで進もうと思うの」

視界を奪われた状態だから、リリの言葉がケンの心にすーっと染みしてくる。決して嘘のない、心からの気持ちでケンは答えた。

「うん。俺もそう思うよ、リリ」

「うん」

「リリ。聞いてもいい？」

「ん？」

「もし、今日全部終わらせられることが出来たら、リリは何をした

い？ 夢とかあるの？」

「んー。その後か。考えたことなかったかも知れない。んー、何かな、わかんないや。ケンは何？ ある？」

「俺？ 俺は……うん、笑わない？」

「笑う？ 笑うわけ無いじゃない。笑わないよ」

「そうか。うんとね、もしできるなら、地球に行ってみたい。行ってみてみたい。だってさ、昔の人たちは、まあやり方はどうかと思うけど、いつかまた俺たちに地球に戻って欲しいから、こんな馬鹿げた仕掛けをしたんだろ？ その為に、子孫が絶えないよう、願ったんだろ？ その思いのせいで、俺たちがこんな思いをさせられたんだもん。気になるじゃないか。地球ってのは、どれだけ素晴らしい星なのか。どれだけ美しい星なのか。だから、俺が見定めに行つてやる！ ってさ」

リリは黙っていた。

「ほらー。笑うの我慢してるんじゃないだろうな、見えないからつてずるいぞ」

「違う、違う。笑ってなんかないよ」

「本当かなー、言うんじゃないかな、恥ずかし」

「……ケン」

「なんだよお」

「私もその夢、一緒に見ていい？」

「……」

お互い、その顔は見えていないけれど、二人ともがまっすぐ前を見つめていた。そして、テレながら、ケンは言った。

「いいよ」

第二十章

二十

何度か検問所のようなところで、車が止められることはあったが、一度も荷台の扉が開くことはなかった。かすかに聞こえてくる、門番と運転手の会話から汲み取れる内容は、ラウ・ジンの言った通りだった。

そしてとうとう、その場所へ着いた。車が止まり、エンジン音まで消える。すると外の会話がより明瞭に聞こえてくる。

「この荷物、今日は医療ルームに入れてくれて言ってくれたよ」

「医療ルーム？ 珍しいな……。まあ、分かりました」

会話の一方は、子供の声のようだった。

「カルヴァーに頼まれたんだ。全部運んでくれる？」

「ああ、そうなんですか。分かりました。すぐ済ませます」

間違いなく、ここはコア・シティ内、IAA施設である。とうとう、たどり着いた。こんなにも簡単に進入できる方法は、きつこの方法以外に無いだろう。しかし、こんな抜け道があることを、一体どれだけの人数が知っているのか。そもそも、この情報を知りうる立場とは？

ケンは次々と運び出される荷物の中で、まずはこの状況が一旦落ち着くのを待とうと思った。しかし、ラウ・ジンの顔が脳裏をよぎる。

ここからどうしたらいい？ ラウ・ジンは来ているのか？ ここで外に出ても安全なのか？ さっきの会話では、通常とは違う部屋に運ばれているらしいし、今回はイレギュラーなのかもしれない。その判断さえ、外が見えないこの箱の中では不可能に近い。

その焦りを隣にいるリリも感じたようだ。極小さい声で言う。

「ここから出ても大丈夫なのかな」

「分からない。もう少し様子を見よう」

リリは首を縦に小さく動かした。

荷物を出し入れする音が止まり、また会話が聞こえる。

「では、ここにサインをお願いできますか？」

「はい。ご苦勞様」

ガタンという音と共に、一気に静まり返る部屋。どうしたものか、ケンも聞き耳を立てるくらいの事しか出来ずにいた。

と、真っ暗なケースの蓋がいきなり開き、部屋の明るい照明が目をつぶした。思わず声がでる。

「うわっ！ 眩しい！」

リリも同じように眩しい、と言う。二人は目を隠しつつ回りを見ようとする。

次第に慣れてくる目を、しばしばと瞬きしていると、人影が目の前に見える。一瞬体を引いてから、焦点を合わせようとしてみる。

「……ラウ・ジン？」

そこに見えたのは、ラウ・ジンのようだが、先ほどとは何か雰囲気が違う。

ケン達が目を慣らしていた間に開けられたのだろう、レンジとアツシユもケースから体を起こし、ケンたちと同じようにその人影に目を奪われている。

「ラウ・ジンなのか？」

そこに、部屋のドアロックを開錠する電子音が聞こえた。開いた扉から、スルツと入ってきたのを見て、息を飲む。

「着いたか」

今度は間違いなくラウ・ジンだった。

「今届いたところ。今僕が蓋を開けてあげてたんだ。大分遅かったね、大丈夫だったの？」

「まあね。ちよつと焦ったけど」

混乱するケン達をよそに、二人は平然と話している。

目の慣れた四人全員が、二人の顔を見比べて言葉を失う。並べば、なんとかどちらがラウ・ジンは分かる。一人は線の細い、色白で

儂げな雰囲気を持っている。ラウ・ジンも華奢ではあるが、もう少し筋肉質な感じがある。しかし、その二人は似てる似てないではない。そっくりだった。

それを様々な思いで、食い入るように見ている四人に、見かねたラウ・ジンが笑顔で話し出す。

「分かったよ、説明しろってことね？　ここは、I A Aの施設内の医療ルーム。診療所みたいな場所ね。ちなみにこの部屋の監視カメラは昨日の内に静止画像に切り替えるようにセッティングしてあるから、安心して」

「ちがうって！」

ケンはずい声を出してしまった。まずい、と顔で訴えたが、それも笑われる。

「大丈夫。ここは防音の上、録音もされてないから、大声で話していいよ」

ふーっと、肩を降ろしたケンが仕切りなおして聞く。

「や、だから違うって言うの。ここの場所のことももちろん聞きたかったけど、その、もう一人」

そう言う、ケンの見る先を追ってラウ・ジンも隣を向いて、やっとなんか分かったようだった。

「ああ。なるほどね」

隣の少年も、ラウ・ジンに笑って返す。

「こいつが、僕の双子の弟でもあり、君たちがここに来た目的でもある、ソウだ」

ケースの中で座ったままの四人は、そのままただ啞然とするばかりだった。

医療ルームと呼ばれるその部屋は、その名の通り、二台の診察用と思われる白いベッドが窓際に置いてあり、壁にズラリと並んだ棚には、細かなビンに入った薬品が置かれている。奥に備えられたラックには、ケン達が入っていたのと同じケースが幾重にも積み重な

っておいてある。備品のストックであろう。

既に日も暮れ、暗くなつた空を見上げるそのベッドに腰をかけながら、ラウ・ジンは話し始める。

「びつくりさせるつもりはなかったんだけどね。黙っていたほうが色々動きやすかったから。それだけの理由なんだ、許してね」

レンジは床から立ち上がり、ラウ・ジンと向かい合う形で、もう一つのベッドに座るソウをちらりと見てから言う。

「だから、普通じゃ絶対外に漏れない様な情報も、知る事が出来たってことか」

「まあね」

普段通りのラウ・ジンの笑顔だ。

ケンは強い口調で、大声を出さないように声を絞って言い寄つた。
「一体どういう事だよ。お前、俺たちを騙したのか？ 本当はこの奴らと仕組んだんじゃないだろうな！」

それにはラウ・ジンでもソウでもなくアツシュが答えた。

「ケン。もし僕達を騙してここに連れてくる目的なら、もっと簡単に何度でも他にチャンスがあつたはずだよ」

肩を叩くアツシュの顔を見て、ケンは少し落ち着こうと意識する。
「だったら、なんで監視なんかしてたんだよ。その理由だってちゃんと聞いてない。俺は少なくとも、お前とは友達だと……」

途中で自分の言葉を言い淀む。ケンはそのまま口を閉ざす。

自分には、心から友達と言えるような友情は築いてきたことがあつただろうか。自信を持つて、ラウ・ジンを友達として大切に思つてきたと言えるのか。ラウ・ジンがケンに理由があつて近づいて来たからと言って、偉そうに被害者面できるのか。

「僕に説明させて」

静かに言い出したのは、ソウだった。

「僕がラウ・ジンに頼んだんだ」

腰掛けていたベッドからぴょんと降り、ケンとリリの方に向かって行く。

「僕は、ここにずいぶん長いこといるんだ。本当にずっと。でも、何も知らなかった。自分の周りで何が行われているのか。たった幾つかの壁を隔てた向こう側で、とんでもない残忍な行為が行われていることにも、何も気づかないでいたんだよね」

何か言いたそうに見つめ返すケンと、ずっと下を向いたままのシリ。ソウは語りかける。

「一年ほど前、全部見てしまったんだ。全てを知る人の、コンピューターにしまわれた、今までの結果と今後の計画」

そのコンピューターを開くのに必要なパスワードが、自分の名前であったことを思い出し、持ち主の想いを裏切っている胸苦しさで、ソウは奥歯を噛む。

「幸せだったのは自分だけだった事に、びっくりしたよ。同時にそんな自分が許せなくて、吐き気すらしたんだ。ずっと閉じ込められているってふて腐っていた自分は、実は守ってもらっていたのに、自分は可哀想だとすら思っていたんだもの」

自嘲的に笑いながら、ラウ・ジンに向き直る。

「一刻も早く、PUREのPPPが来てくれないかと願ったよ。全てを終わらせる為には、それしかないって思ったから。その時、PPPの可能性のあるPUREが二人に絞られたって知って、ラウ・ジンに頼んで、ずっと様子を見てもらった」

アッシュは小さく訊ねる。

「事の成り行きを、手の中に入れる為に？」

「そう。それにどんな人たちなのか、すごく興味があった。僕を助けてくれる、ヒーローみたいに思ってたよ。その人が来てくれれば、ハッピーエンドだって。でも、甘かった。政府は、PPPを見つけたからって、大人しくアースの無効に着手するつもりなんてなかったんだ。もちろん、捕まえたPPPを無事に解放するつもりなんてなかった」

四人はぎょつとする。国に命を狙われるという恐怖は、改めて聞いても絶望に値する。

「待っていたってだめだって思った。だから、僕はラウ・ジンと一緒に自分達の手で終わらせてしまおうと考えたんだ」

ケンはずな垂れていた顔を上げ、聞き返す。

「自分達の手で、終わらせる？　俺達と同じ事考えてたんだな」

今日ここに至るまでの経緯は、まるで違う二人ではあるが、PPに狂わされた道を、自分達でなんとかしようとする気持ちは同じだということが、ケンにはなんだか不思議に思えた。

「なぜ、ソウだけここに？」

突然、リリが声を出す。

え？　と聞き返したのは、ケンだった。

「双子ならラウ・ジンも同じDNAを持っているんじゃないの？」
一卵性の双子の兄弟であれば、DNAは同じはずである。元々が特別な遺伝子であるはずのPPPに、その通説が当てはまるのかどうかはわからないまでも、当然の疑問なのかもしれない。

その質問は、ソウの表情を一気に曇らせた。一方、ラウ・ジンは一瞬、伏し目になっただけで、端的に話し始める。

「偶然が重なったんだ」

「偶然？」

レンジは首をかしげる。

「十五年ほど前、全てのLUVの子供が血液検査を受けなくてはならないって、役所から通知が来て、その当時結構な騒ぎになったの、知ってる？」

「ああ。本当は伝染病が危険なウイルスでも発生したんじゃないかって、親達は大騒ぎだったって聞いたことがある。実際は、政府が住民の統計を取る為だったって事で、収まったらしいけど。……あ、まさかあれって」

アッシュは、以前ネットで読んだ記事を思い出しながら、途中で感づく。

「そう。あれは、政府が本格的にPPPの研究に取り掛かる為の策だった。もっとも、当初は、PPPを見つけないというよりも、様々

なDNAのサンプルを取って、今後の研究に役立てるつもりだったみたい。でも、その中に非常に特殊な配列のDNAを持つ子供を見つけたことができたんだ。偶然に、ね」

リリはラウ・ジンの目を見ながらその先をよむ。

「それがソウだったのね。でもなぜソウ一人だけが？」

「また偶然さ。たまたま母さんが血液検査の予約を入れた日に、僕だけ熱を出した。しょうがなく、その日はソウだけを連れて行き、僕のことはまた後日に、と置いていったんだ。でも、ソウの血液を調べた時、突然役人達はソウを取り上げて、連れて行ってしまった……」

「でも、双子の兄弟がいることなんて、役所の人が調べれば、それこそすぐにバレてしまうんじゃない？」

ラウ・ジンは呆れたような笑顔を向けて語る。

「これも偶然。僕らの父さんは、役所の戸籍課に勤めていたんだ。まさに、僕らの出生の記録を管理する部署に。あとは、もう分かるかな……？」

リリは、眉を寄せて目を凝らす。

「記録を書き換えた……？」

「正解。母さんがソウを連れて行かれて真っ先にしたことが、父さんに僕は死んだことにして欲しい、と伝えることだった。そして、母さんの古い友人である、僕の育ての親のところに、僕を連れて行つたって訳。本当の僕の名前は『ラウ』。『ジン』という名前は、育ての親が後から付けてくれた。どちらも本当の母親だ、ということとで二つの名前をくつつけて『ラウ・ジン』になったらしい。まあ、実は、僕もそれを知ったのは、最近。育ての親が、全て教えてくれた。遺言で、だけどね」

リリは、ここにも辛い経験をしている若者がいるのか、と目をきつく閉める。いくつの人生がPPPの為に狂わされているのか。悔しい気持ちで胸が痛くなる。

ずっと黙って聞いていたソウが、堪らなくなつてケンに説明する。

「ラウ・ジンは何より、僕をここから助け出す事を考えてくれた。でも、僕はアースを無くさない限り、何も変わらないって分かってた。だから、僕はここで、ラウ・ジンは外で、情報を集め、計画を練った。分かってほしい、ラウ・ジンは君達を騙したりしたんじゃないんだ。君達と同じ、PPPの悪夢を終わらせる為に、動いていただけなんだ」

ケンは、頑張って自分の顔を笑わせ、ソウに返事をした。

「わかったよ。俺こそ、騙したのか、なんて言って悪かった。俺達は、同じ事をしようとしていただけなんだな」

ソウは嬉しそうに笑う。

「うん。そしてそれも今日で、全て終わる」

その場の誰もが、期待と不安で高揚する。

そこに集まったのは、六人の少年と少女。時と場所が違えば、ただの友達同士として、仲良くなれたかもしれない。しかし、今彼らが迎える瞬間は、そんな日常の一コマではない。苦しまされた日々の清算と、明日から始まるべき新しい道へと進む為の儀式とも言える、終止符を打つ時。

緊張とは違う、高鳴りとも違う、息を深く吸えない、何かに詰まる空気。

ケンは強く言う。

「やるべきことはわかってるんだ。終わらせよう。全部終わらせてから、俺達、お互いをもっと知り合えるさ。今は、ここに來た目的を果たそう」

リリはケンから目をそらさないままで大きく頷く。レンジもアッシュも、自然に力が入る。

ラウ・ジンは、いつもの笑顔をこの時は崩していた。

「ここには全て必要なものが用意できている。すぐに取り掛かれるあとは……」

そう言っ、ラウ・ジンはソウを見つめる。

「そつえば、LUVのPPP潜在能力の開放はされているの？」

条件は分かったって」

リリが以前ラウ・ジンが言っていたことを思い出した。
全て了解している、という顔でソウは柔らかに頷く。

「安心して、問題ない。すぐに終わるから。その前に聞いて欲しいことがあるんだ」

妙に落ち着き払った様子のソウに、ラウ・ジンは怪訝そうに言う。
「ソウ。開放条件って一体なんなんだ。まだ準備できてないってどういうことだ？ 一人ではできないことなのか？ もう教えてくれないだろうか？」

「どういうこと？」

ケンはその会話に割り込む。ラウ・ジンにも焦りの色が出る。

「実は、ソウから開放条件が分かったって聞いたけど、その方法は当日になれば分かるって言うから、僕もまだ聞いてないんだ」

ソウは静かに立ち上がり、部屋の奥に向かって歩きながら、どこまでも穏やかに話し始める。

「開放条件はね、簡単な事だった」

ソウは薬品のストック棚のある、部屋の突き当たりまで行き、振り返る。

「PUREと同じ」

にこつと微笑みながら、いつの間にか手にしているボトルを口に持っていく。

「……おい、やめろー！」

ラウ・ジンが飛びかかる。

壁に押し付けられたソウは、その勢いでボトルを床に落とす。

一瞬遅れて、その意味を理解した四人は、ソウの足元に転がるボトルを見て息を飲む。

それは、先ほどシューターの前でラウ・ジンが話していた、IAの使う毒殺用の水だった。

リリは反射的に上げる悲鳴を止められなかった。

「そんな……！ 解毒剤は？ ないのか？ ここ医療ルームだろ？」

ケンも状況を忘れて駆け寄りながら、声を上げる。

レンジは呆然と立ちつくし、アッシュは手当たり次第、近くにある薬品を調べるが、心当たりがあるわけでもなく、横目でラウ・ジンの背中を見守るばかりだった。

ラウ・ジンは必死の形相で、ソウの体を床に座らせ、背中をさする。

「出せ、出してくれ、ソウ！　なんてことするんだよ！」

気づきもしないその瞳から流れ出ている涙が、ソウに降りかかる。ラウ・ジンには分かっていた。この毒で作られた水を一度飲み込めば、その吸収を止めることなど出来ないことは。しかし、このまま見ていることなどできるだろうか。

「一体……何をしている……！」

その声は突然後ろから聞こえた。

ソウ以外の全員が驚いて振り返る。

「お前達は、PURE？　ソウ……？　そんな……まさか、双子？　ドアの前には、次々に目にはいる状況が信じられないという表情で、立ち尽くすカルヴァーがいた。

「だれ……」

身構えながらその背の高い男を見返すレンジに、アッシュは言う。

「カルヴァー・シュレイズ。政府の役人。IAAの総責任者」

レンジだけでなく、ケンもリリもその答えに驚いていた。

ソウは、ラウ・ジンの顔を見たまま答える。それは予測の範囲だったかの様に驚く素振りは見せずに。

「早かったんだね、カルヴァー。もっと地下での騒動の收拾に、時間がかかるかと思ってたんだけど。さすがだね」

カルヴァーは、部屋を一瞥した次の瞬間に、自分の血の気が引いていく音までを聞いた。床にあるボトルを見れば、その末路がどうなるか、わからない訳がない。

「ソウ！　なんて事を……！」

その場で片膝をついてしまうほど、力が抜けた。

「……なぜ……」

ソウは、徐々に薄れ始める意識と、味わったことのない痛みが湧き上がるのをなんとかごまかしながら、一言一言、大切に言葉にしていく。

「……ケン、リリ。もう説明しなくても、わかるよね。僕が……死んだら、すぐにラウ・ジンの血液を輸血して。僕達の目的を、果たして欲しい。頼んだよ。レンジ、アッシュ。来てくれて……ありがとう。できたら、ラウ・ジンとこれからも仲良くしてあげてね」

リリが声を上げて泣く声が聞こえると、ソウは少し笑う。

「カルヴァー。聞こえる？」

もう何も説明の要らないほど、自体を把握していたカルヴァーは、壁に背中を預け、呆然とした顔で、ちいさく返事をする。

「……ええ。聞いています」

「いままで、ありがとう。本当によくしてくれて。なのに、いい子でなくて、ごめんなさい」

カルヴァーは痛みと愛情の籠った瞳をそらす。血の気のなくなっていく顔を、それ以上見ることが出来ない。

「最後に一つだけお願いがあるんだ」

肩で大きく息をしてから、話し出す。

「この五人を……逃がしてあげて。もう、これ以上、誰も苦しまないように。……お願い」

カルヴァーは、下唇を噛み、必死に気持ちを抑える。いくつもの命を殺めてきた彼に、欠如していた感情が怒涛のように押し寄せ、人を失うという本来の悲しみを教えられる。口元に手をあて、どうにもならない事に、ぶつけようのない悔しさを握ったこぶしに掴んでいた。返事をする事もできず、そのまま、崩れるように床にへたり込む。

ソウは、最後の力を込めて、唯一の家族に向かって語りかける。
「ラウ・ジン。……聞いて。最後まで……黙っていて、ごめん。でも、僕は……ラウ・ジンがいてくれるから、死ねるんだ。僕の……」

半身……が僕の代わりに、いてくれる……から」

ラウ・ジンはどうすることも出来ずに、ソウの腕を抱えながら泣いていた。

「僕の分も、……色んなところに行ったり、色んな人と会ったり、恋愛……ははは、とかもしてさ。幸せな人生……ってやつを、送ってくれるって、しん……じてるから」

話す言葉は既に、息切れと共にしか発することが出来なくなっている。

ボトルの水を口に含んでから、三分が経とうとしている。

「ソウ……」

「いま……やっと、僕に……生まれてきた価値が……理由が……みんなの役に立って……だから……うれしいん……だ」

「ソウ！」

小さな息と共に、全ての力がソウから抜ける。

最後の言葉は、嘘ではないのだろう。苦しかったであろう最期を迎えたはずなのに、満足そうに微笑んでいるのだから。

「わああああ」

堰を切ったように、その体を抱きしめながら、ラウ・ジンは泣きじやくる。やっと出会えた家族が、また目の前でいなくなってしまう。その虚無は涙で埋められるものではないはずなのに、止めることは出来ないほど。

ケン達も、すべきことの優先順位がわからない。それにもまして、気持ちが一杯一杯でもある。

その時、大きな声が部屋に響く。

「お前達は、一体何をしに来た！ ソウを死なせる為か？ なんてこんな事になるんだ！」

感情のままに叫ぶその声は、怒りを超えた悲痛なものだった。

「こんなところまで乗り込んで来て、自力でアースを無効化させる為か。いい度胸だ！ 自分の命を守る為に、危険を冒して、最期はソウが死んでくれた。後は輸血をするだけか！ 思い通りだな！」

これも計画通りか？」

「ちがう！」

睨み付ける先には、感情をあらわにするケンがいた。

「俺達は、そんな思いでここに来たわけじゃない！」

今のケンには、アースを無効化しなければならない事や、目の前のLUVに捕まってしまうかもしれないという思いは、どこかにいつていた。ただ、自分や仲間の思いを、私欲にまみれたものだと取り換えられるのは、許せなかった。

「俺達は、確かにアースを無効化させる為に来た。それに、もう、追いかけられたり、逃げ回ったりするのいやだった。でも、自分の為だけじゃない！ 自分が助かればいいなんて思っていない！」
「ならばなぜソウが死ななければならない！ ソウは死に、助かるのはお前達だけだろう。ソウの命を踏み台にお前達は生きていくのではないのか！」

カルヴァアの放つ言葉はケンにも聞いている四人にも痛かった。ソウの死がもたらす事実、言い方こそ違えどその通りなのだから、でも、ケンには言わなければならないことがある。一度、大きく息を吸って、一気に吐く。

「あなたの言うことは、事実かもしれない。でも、きっとそれはソウの願ったものじゃない！ ソウはきっと、ソウは、あなたに分かって欲しかったはずだ！」

「私に？」

ケンは、大事そうにソウを抱えるラウ・ジンから目を離して言う。
「大事な人を失う辛さを、その苦しみを、あなたにも分かって欲しかったに違いないんだ。だから、自分が最後になることを願って、全てを終わせようとしたんだ。その気持ちを、あなたが分かってあげなければ、ソウが自分の命を投げ出した意味すら無駄にしまう！」

前が良く見えないのは、自分の涙のせいだと気づかずにいるケンの腕を、そっとリリが掴む。顔を上げたまま、その手をケンは反対

側の手で握り返す。

「俺達は、絶対無駄にしない。ソウも、俺達の家族も、たくさんのPUREの命も、全てがアースの無効化に向かった道だったのなら、俺達は、そこをまっすぐ進む！」

無我夢中だったケンが、荒げた息をそのままにカルヴァーに向かう。

嫌な沈黙が流れる。

無意識に息を荒げていたケンの呼吸が、部屋の中を埋めていく。うな垂れるしかないケン達は、ただその空間に佇んでいた。

事情がどうであれ、ここは敵地であることには変わらない。少し前まで希望に満ち溢れていたこの部屋は、すでに監獄同様といってもおかしくはないのだから。

しかし、次の一言は静かに、それでもはつきりと、ケンの耳へ入ってくる。

「……五分」

「えっ？」

ケンは、今さっき自分達を罵っていたのと同じ声が言う言葉の意味がわからなかった。

怒りとも、悲しみとも違う感情の波の中で、カルヴァーは口を動かす。

「五分間だけ、侵入者警報を鳴らすのを待ってやると言っている」

レンジとアッシュがお互いを見合わせる。ケンはカルヴァーを見返して言った。

「……逃がしてくれるのか？」

「それが、ソウの初めてで最後の、私への願い事だというのなら、私はそれを叶えるだけだ」

憔悴しきっているが、ぐっと堪える表情は、どこことなく威厳を感じる。

「さっさと行け、気が変わる前に。裏の通用出口から出れば、街までもすぐだ。見つからずに逃げれる」

レンジがラウ・ジンをなんとか立たせて連れて行こうとしている。リリとアッシュもドアを開けてケンを待つ。

ケンはそのまま出ようとして、一度躊躇し一言だけ付け足す。

「……ありがとう」

そのまま、五人は振り返らずに裏口を目指した。

部屋に残ったカルヴァーは、小さな亡骸に目を向ける。その顔は、嬉しそうに微笑んで、痛みのない世界へと旅立っていったかのよう。無くしていた胸の痛みに震えながら、カルヴァーは呟く。

「お前は、会いたがっていたものな。あのPUREたちに会うことを、それだけを楽しみにしていたものな……」

LUVの潜在能力発動の方法を知ったとき、ソウはすぐにでも自らの命を絶とうと覚悟した。

しかし、その前に一つだけ、わがままを叶えさせて欲しいと思ったのだ。

それはPUREのPPPに会うこと。

どんな人たちなのか、ソウはどうしても自分の目で見て、彼らと話をしてみたかった。

だから、わざわざここまで来てもらう手はずをラウ・ジンと整えたのだ。

ソウは満足だった。

彼らになら、PPPの結末を任せられると、思ったから。自分は、何の心配もいらずに、この世を去ることが出来ると。

これがソウの、生まれて初めての、自ら選んだ道だった。

終章

エピソード

「本当にそれで合ってるの？」

リリは腕を組んで、ケンに苦言を呈する。

「んなこと言っただってさー。アッシュの設計図通りにだと、こうなるんだもん」

「ちよつと、僕のせいにしないでよ。僕の設計は完璧のはずなんだから。あとは、技術者次第って事だからね」

「そついうの、自画自賛っていうんだろ？」

このパターンだと、決まってアッシュは得意の溜め息で返すことになる。

「はあ。レンジ、それを言うなら……あ、合ってるな」

それを聞いていたリリが大笑いをして、釣られてみんな笑う。

ここは、ケンの家の庭。地下にある廃材などを持ってきて、ケンの壊れたエア・バイクを修理しているところだ。最近では、よく集まって、それぞれが失ったものを補う手伝いをしている。

「おい、これ見た？ 今日のニュース」

そう言っただけで来たのはラウ・ジンだ。

あの日、IAAから無事に逃げ出せたケン達は、そのままコア・シティを出た。アッシュが持ち出していた、採血用の道具を使い、無事、アースの無効化を成し遂げた。

ケンとリリのどちらがPPPだったのか、などと言うことは、彼らには興味のないことだった。とにかく、終わらせることが出来れば、それで十分なのだから。

今までと、何も変わらないように見える日々がまた始まった。そのいつも通りの日々こそが、なによりも大切なものだということに気づくことが出来れば、それが本当に幸せということなのだろう。

ケン達は、その幸せの正体を、忘れることの出来ない経験と共に、

知ることになったのだ。きっと、それこそが、選ぶべき道であつたに違いない。

「んで、ニユースって何？」

ケンは油で汚れた手のひらを、リリにわざとくつつける振りをして叩かれていた。

ラウ・ジンが、楽しそうな顔を四人に向けて言う。

「探査に出ていた衛星が戻ってきたらしくてね、なんと、地球が数百年前程度まで、環境改善したって。人も住めるだろうってさ」

その数年後、緑豊かな地球の地を踏む若者達の写真が、マナ中を沸かせる話題になった。

完

終章（後書き）

「Gravel―グラヴェル」を最後までお読みいただきまして、誠にありがとうございました。

簡単にこのお話のタイトルについて、ご紹介させていただきます。

このお話は、「道」というものが一つのテーマになっています。

それぞれが進んできた道。それぞれが進んでいく道。

タイトルの「Gravel」という言葉は、「砂利」と言う意味です。

歩きづらいし、砂埃も舞うけれど、足の裏で歩いていることを実感できる砂利道。

舗装された道を進んできた主人公が、そんな砂利道を歩いていくことをイメージしました。

決して特別ではない、いたって普通である主人公に、共感していただけなら嬉しいです。

重ね重ね、お読みいただきましたことを、感謝申しあげます。
ありがとうございます。

りき

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5908c/>

Gravelーグラヴェルー

2010年10月8日15時52分発行